☆世界同時革命・世界革命戦争
世界プロレタリア独裁
共産主義勝利！
共産主義者同盟

第178号
（1986年）1月1日
本号　500円
定期購読料
1年　2500円（送料別）
送料　買切　800円
開封　500円

蜂起

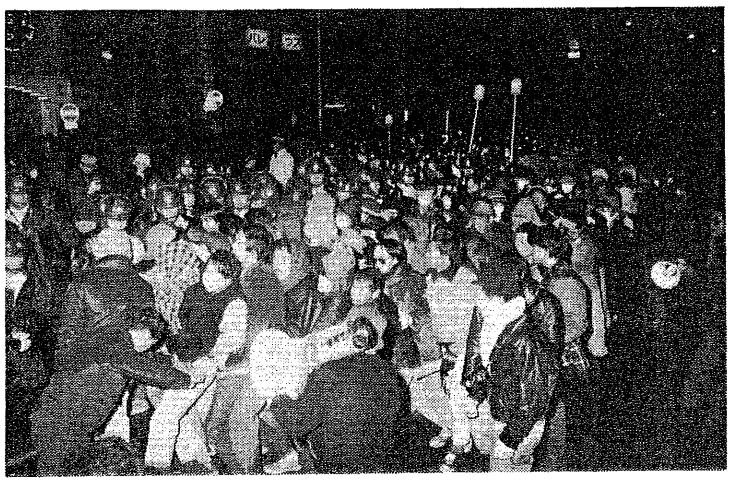
蜂起社
編集発行人　南　安明
本社　東京都渋谷区広尾5—16—16
TEL 03（446）0832
（振替）東京2—1512
関西支社
大阪市北区富崎町10—10
岩本ビル
TEL 06（357）6975

85—86山谷越年越冬闘争
12・25　突入宣言集会　午後6時30分／清川出張所
12・28　玉姫公園突入
1・5　'86団結旗びらき　午前10時／岩山記念館／主催　三里塚芝山連合空港反対同盟
1・17　赤堀氏奪還・静岡地裁包囲闘争　午後1時／青葉公園／中闘委
1・22　FMLN（ファラブンド・マルティ民族解放戦線）連帯行動
2・11　「紀元節」粉砕—天皇闘争
2・20　LA学習会—「グランマから30年—キューバ革命の原点を見る」6時30分／千駄ヶ谷区民会館／主催　LA実

86年年頭論文

SDI核戦争と天皇攻撃と対決し
階級深部の怒りの中から武装せよ！

共産主義者同盟蜂起派



山谷・玉姫公園を出撃したデモは、マンモス交番前で多くの労働者を糾合、怒りは倍加し、権力に肉迫していった。（85年12月22日、佐藤さん虐殺一ケ年糾弾闘争）

八六年蜂起派政治組織スローガン

■SDI核戦争体制下の米日「韓」反革命軍事同盟と対決し、核安保—日「韓」・天皇—改憲総路線闘争を貫徹せよ！
■日帝・中曽根の「戦後政治の総決算」攻撃—天皇在位六〇年式典—八七年天皇沖縄上陸・沖縄「日の丸国体」を粉砕せよ！
■山谷・沖縄・三里塚を出撃拠点に、階級的労働運動を打ち固め、天皇主義ファシストを実力粉砕せよ！

SDIに走るレーガン核戦略と借金国に転落した米経済の破綻

ジュネーブの米ソ首脳会談は、米帝の戦略防衛構想（SDI）をめぐる対立を残したまま八五年十一月十九日—二十日の両日に亘る討論を終え協定なき妥協として幕を閉じた。この会談は、①核軍備の管理と軍縮②地域紛争③二国間問題④人権問題の四議題がとりあげられてはいたが、実質議題はSDI（所謂スターウォーズ計画）をめぐる両首脳の相互打診であった。即ち、米帝は、攻撃核兵器の技術と破壊力の面で既に米帝と並んだソ連に宇宙戦争の先端技術の面で挑戦し、核兵器より遥かに桁違いの巨額な資金を必要とするスターウォーズ計画にソ連を引きずり込んで経済的に破滅させようと考え、ソ連も、米帝のスターウォーズ計画が米経済の破綻ゆえに青写真どうりには進展しないことを見通した上で絶対反対のポーズを世界に示し、止むなく宇宙戦争の準備を始めざるを得なかったという大義名分を得ようとしたにすぎない。

このような軍事と政治の動向を規定しているのが、米ソの核軍拡路線それ自身が招いた経済破綻である。レーガンの核軍拡は、未曽有の財政赤字から高金利・ドル高・貿易赤字を招き、遂に米国を純債務国に転落せしめるに至って、諸列強から低金利・ドル安への転換を迫られた。ソ連の核軍拡に基づく軍事産業優先政策は、基礎産業部門とりわけ消費資料部門の生産を圧迫し、六年連続の農業経済不振を招き、五ヶ年計画の目標達成を連続して困難にしている。こうした米ソの経済破綻が、米ソ戦域核会談体制の逢着と相俟って、七九年以来、断絶かつ対立してきた米ソ首脳が六年ぶりに同席すること自体が「成果」だと言われるジュネーブ会談を呼び出したのである。

米ソが破綻した経済の打開に時を必要としていることは確かではあるが、米ソ核軍事対決の構造は不変であり、新たに宇宙戦争計画への準備が開始されたので、更なる米ソ経済の悪化は必然であり、米ソの諸列強と支配圏諸国への軍事的攻撃と重圧も必然化しつつ新たな宇宙戦争時代を準備する年となり、スターウォーズ計画と戦域核戦争体制の強化が諸列強と支配圏諸国に強制され、諸階級諸階層に対してファシズムの嵐が吹きまくる年となる。

かかる国際動向の中で、米帝のSDIを積極的に支持し対ソ核戦争体制の確立へ乗り出したのが日帝・中曽根の「戦後政治の総決算」である。即ち、総力戦戦争体制の確立を目指す改憲に向けたファシズム攻撃が、天皇イデオロギー攻撃を柱として、軍事・思想・政治・労働の全分野で発動された。八六年の日帝・中曽根の攻撃の基軸は、天皇在位六〇年式典の強行である。我々は、隗級深部に依拠して隊列を強化かつ拡大し、山谷・沖縄・三里塚から日帝と天皇に断乎たる戦闘を挑むのみである。

国防省SDI局長が記者会見し「SDIの研究は予想以上の進展を見せているので九〇年代の早い時期に技術的に実現可能か否かの結論が出せる予定だ」と語った。

これほどまでに米帝がSDIに拘わり続けるのは、既に崩壊した「強いアメリカ」路線にいまだにしがみついているからであり、対ソ軍事優位を獲得するには、米帝がソ連に対しても諸列強に対しても唯一優位を保ち続けてきた先端技術の力を発揮できるSDI（スターウォーズ計画）で勝負をかける以外に打つ手が無いからである。

レーガン大統領は、カーター前政権の末期に勃発したソ連のアフガン侵攻を「きっかけとして対ソ逆攻勢に出た。その旗印こそ「強いアメリカ」の再生であり、その戦略こそ戦域核でソ連本国の戦略核を殲滅する包囲体制であった。即ち、この戦略核殲滅で対ソ核戦争に勝利し、ソ連だけが生き残る「生き残り核戦略」を実現し得る「強いアメリカ」を再生した時にのみ、ソ連を屈服させることが出来るという戦争理論で逆攻勢は開始されたのである。

だが、しかし、現実にはソ連の原蓄戦域核と原蓄戦域核による米本国の戦略核殲滅包囲体制が敗われて「生き残り核戦略」は崩壊した。そして、その後に、米ソ戦域核合撃体制の時代が到来した。

レーガンは、それにも拘らず対ソ軍事優位の「強いアメリカ」の夢をすてきれず、米帝が最も得意とする先端技術の力に依拠しつつSDIに最後の望みを賭けているのである。米帝も莫大な資金を必要とするSDIが破綻した米国経済を更なる困難に突き落すであろうことを全く認識していないわけではない。ただ、己が苦しい時は敵も苦しいのだから、ソ連にスターウォーズ計画で膨大な財貨を消費させて破滅に導こうという目論見なのである。即ち、工業生産力において米帝の七～八割にしか達しないソ連を膨大な資金を要する宇宙戦争計画に誘い込めば、必ずやソ連経済の方が先に破滅に追いやられるであろうと、米帝の梶刀中枢は計算しているのである。

米帝のSDI推進には、もう一つの狙いがあった。それは、米国の帝国主義諸列強に対する指導者としての立場を再び取りもどすことにあった。

米帝の主導権は、経済力に関する限り、既に完全に喪失していた。米帝の高金利とドル高政策は諸列強の総反発を呼び出し、米帝の純債務国への転落という決定的な事態に立ち至って、米帝は諸列強から金利を下げてドル安と転換せよと最後通牒を突き付けられ、遂に「強いアメリカ」の象徴と豪語してきた誇りを捨てて屈服した。

米帝が国際協調体制において諸列強に優位に立てるのは先端技術だけであった。それ故に、米帝は戦略防衛構想に諸列強を参加させ、五年間に二百六十億ドルというSDI予算の分け前と先端技術のおこぼれを餌にして、諸列強に対する主導権を再び取りもどそうとしているのである。そして、その狙いは一部成功しているのである。

この餌に真っ先に喰いついたのが英帝のサッチャーであった。ジュネーブ会談の終結後に西独のコール首相はクリスマス前にSDI協力協定に調印する可能性を示して研究参加の方針を明確にした。これは西独経済会の強い要望によるものであった。

日帝・中曽根も、既に、スターウォーズ計画の研究支持を明らかにしており、米帝の対ソ宇宙戦争計画への屈服の方向を鮮明にしている。

しかし、米経済には、スターウォーズ計画を巨額の資金をかけて実現化するだけの余裕は無い。それは、レーガンの軍拡が米経済を破綻させ米帝を借金国に転落させた現実過程を見れば明白である。

レーガンの軍拡で、歳出の約三分の一を占める国防費は、二千億ドル台の空前の財政赤字を生み出した。レーガンは財政赤字に困って金融市場で国債を乱発し民間貯蓄金を圧迫する結果を招いた。そこで外資を米国に吸い寄せるために高金利政策がとられた。かくしてドル高時代が到来した。しかしドルが高くなったのは決して米経済の強さを反映したのではなく、米国の金利が高いからであった。レーガンは、高金利とドル高で外国の資金を米国に吸い寄せることには成功したが、未曽有の国際収支の赤字と外貨依存の借金経営という禍を残した。

ドル高は、最も国際競争力の強かった航空機産業や農業まで輸出不振に追い込み、遂に年間二千億ドル規模の経常収支の赤字を構造的に定着させ、更に、ドル高による貿易赤字の構造的定着と外国資金の大規模流入は、八五年に米国を一純債務国に転落させた。純債務国とは、或る国が他の国へ貸している金額よりも借りている金額の方が多い状態である。要するに純債務国とは借金国のことである。レーガンの軍拡は、米国が永年に亘って蓄えてきた対外資産をあっという間に食いつぶし、アメリカ帝国主義を借金国に転落させたのである。

八五年九月二十二日、ニューヨークで開かれた米、日、西独、仏、英の五ヶ国蔵相と中央銀行総裁の合同会議は、ドル高が米国の未曽有の国際収支の赤字を生み出し保護主義を呼び出していることを確認、ドル高の抑制が不可避であることを合意した。

さすがのレーガン政権も米帝の純債務国への転落という事態に直面して諸列強の合意に屈服せざるを得なかった。それは、ドル高こそ「強いアメリカ」の象徴と自画自賛してきたレーガン政権にとって、敗北宣言を出すに等しかった。かくしてドル安政策の転換が始まったのである。

以上が、米経済の今日的現実である。

従って、レーガン政権が、かかる脆弱な米経済を土台にしてSDIの実現に踏み出せば、米経済の根底的破綻を招くだけではなく、諸列強経済の破滅さえ起すことは必至である。

なぜならば、米帝は、対ソ核戦争の準備に米国が支払った経済の付けは諸列強が当然その一部を負担すべきであるという考えをもち、これまでも「安保のタダ乗り」は許さん」という大義名分を掲げて日米経済摩擦のかたちで日帝に経済負担を要求してきたように、米帝はSDIにおいても、「資本主義の最後的死滅」を招くという強い危機感を抱くが故に無理な要求を妥容しながら日帝に対する諸列強に対する主導権を再び取りもどそうとしているのである。

中国では、遂に鄧小平路線の矛盾が噴出し、新たな階級闘争を呼び出すに至った。八五年九月十八日、北京大学の学生を先頭に、鄧小平政権の禁止令を破って「中曽根打倒」の闘いが組織された。

「瀋州事変」（日帝の中国東北部侵略）が勃発して五四周年に当たる九月十八日の夕刻、北京大の学生ら約千人余は、「中曽根打倒」を叫んで天安門広場にデモの隊列をすすめた。

大学構内では、壁新聞が次々と張り出され、「北京大学同胞に告げる書」と題する壁新聞には、「抗日戦争勝利四十周年の日に、中曽根は深い反省をしなかったばかりか、戦犯の亡霊をまつる靖国神社を参拝した。日本軍国主義は今まさに息を吹き返しつつある。…これは、中国人民への挑戦だ。殺された二千万人の同胞がめいどで我々の行動を見ている。我々に恨みを晴らすよう要求している。…立ち上がれ北京大学の者よ、日本軍国主義を打倒し、ファシストを断固滅絶せよ」と書かれていた。

中国政府に対して、「九・一八（柳条湖事件記念日）を国恥日とすることを要求する」という壁新聞さえ登場した。

天安門広場のデモ、北京大学の壁新聞、これらは、文化大革命以来の画期的闘争であり、鄧小平の脳裏に毛沢東の亡霊と文化大革命の悪夢のような出来ごとを甦えらせずにはおかなかった。しかも、今度の闘いは、毛沢東の権威や政府の御墨付に依存することなく、自分たちで主体的に決起したものであり、その上、鄧小平政権の禁令を破って政府の親日路線に真向から反抗し、反「靖国」「中曽根打倒」闘争へと決起したのであるから、その意義は計りしれないほど大きかったのである。

九・一八決起は、西安、成都へと闘いを拡大し、遂に、日帝の経済侵略に反対し、鄧小平の国内路線を批判する闘いへと発展していった。

八五年十月十六日、四川省の成都で学生と青年労働者の数百人が決起し、日本製品を襲撃しながら反日・反「靖国」・反中曽根を叫びデモを貫徹して武装警官と衝突した。成都の人民南路を制した学生と青年は、北京大学生が未だ鋭くは突き出し得なかった新たな問題、「日本の経済侵略反対」という問題を全中国の人民に提起した。かくて、反「靖国」・反中曽根は日帝の経済侵略に反対する闘いへと発展した。

十月二十六日、中国共産党は、「立ち遅れた中国を近代化するには開放政策をとらざるを得ない」「過去に侵略行為をとった国（日本）とも平等互恵、相互尊重の精神の下に友好関係を発展させるべきである」旋って、諸外国の製品・技術・資本の導入を経済侵略と見なすのは間違いである、という見解を発表せざるを得なくなった。

『中国青年報』（中国共産主義青年団機関紙）の論文「愛国主義と対外開放」は次のように述べている。

「反植民地時代、主権のないまま外国商品がはんらん、中国市場は帝国主義のほしいままになった。これは『経済侵略』である。だが、現在は、主権は中国にあり、必要なものを輸入しているのである。輸入品が多すぎる、良い物を皆もち去られていると見るのは誤解である。」

しかし、党中央の見解も共青団関紙の記事も、中国人民の反日・反「靖国」への怒りは如何ともしがたい感情であったので、鄧小平は中曽根の「靖国」公式参拝にクレームを付けるポーズをとり、北京を初め上海など主要都市に溢れている日本製商品と日帝独占企業の広告看板を取りはずす処置に出ざるを得なかった。

十二・九運動五十周年を前に、動揺した鄧小平政権は、北京広告公司を通して外国広告代理店に対して、天安門前を走る長安街の日本企業の大型広告看板を取りはずすよう申し入れた。そこには、鄧小平政権が七九年の春から解禁した日帝独占の広告、ソニー、松下電器、日産自動車、リコー、キャノンなどのネオン付き大看板がずらりと立ち並んでいた。

十二・九運動とは、一九三五年の十二月

（二面に続く）

宇宙戦争計画の重圧で破滅する ゴルバチョフの所得倍増計画

ソ連「官僚制＝搾取国家」の八六年政治動向を規定する諸要因は次の如くである。

ソ連は、米帝にスターウォーズ計画という新たな挑戦を受け、破綻した国内経済の再建と宇宙核戦争計画との矛盾に引き裂かれようとしている。

即ち、米帝の戦域核（パーシングII＝巡航ミサイル）でソ連本国の戦略核を殲滅する包囲体制に対して、潜水艦発射弾道ミサイルと潜水艦発射戦域核で米帝本国の戦略核を殲滅する包囲体制を敗き返したばかりのソ連が、またもやスターウォーズ計画という新たな挑戦を米帝からいどまれ、破綻した国内経済の再建に痛手をこうむって苦しいと言うことなのである。

ソ連が、米帝の戦域核配備をとれほど譲したかは、一九七四年から横ばい状態を続けてきたソ連の公表国防費が八五年に前年比で十二％増加したことに最も端的に表われている。そして、ソ連が、如何に国内経済再建に悩まされているのかは、米ソ戦域核合撃体制を敗き終えた八六年の公表国防費が前年比で〇・三％に減少していることで判るであろう。

ソ連経済には、対米核戦争を行うだけの余裕はない。それは、ソ連農業が食糧の自給体制をおこれないほど破綻に陥っている象徴とされている。また、ソ連の再生産構造が、どれほど重層生産の重圧を受けて沈滞してきたかということは、ソ連の対米核戦争体制を見れば一目瞭然である。

米ソの核戦争力を核弾頭数と運搬手段で対比してみよう。

大陸間弾道ミサイル（ICBM）では
米帝一二一八発・一〇一八基
ソ連六四二〇発・一三九八基

潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）では
米帝五五三六発・六一六基
ソ連二七八一発・九七九基

空中発射弾道ミサイル（ALBM）と空中発射巡航ミサイル（ALCM）では
米帝二五二〇発・一八〇機
ソ連　六八〇発・一七〇機

戦域核・中距離ミサイル（INF）では
米帝三一〇発・一一八基
ソ連七八三発・二六一基

となっている。米帝が優位に立っているのは、SLBMとALBM・ALCMだけであって、大陸間弾道弾も戦域核もソ連が優位に立っている。ソ連に言わせれば「米帝は諸列強と共にソ連を攻撃できるが、ソ連は米と諸列強を相手に戦わねばならない」と言うことになるが、ともあれ、工業生産力において米帝の七～八割にしか達していないソ連経済が、米帝を主導権を保持し続けようとすれば、その負担が米経済以上にソ連経済に重くのしかかるのである。

このソ連核戦力の実数こそソ連経済の再生産構造を破綻させた軍需重視政策の具体的指標である。そして、この破綻した国内経済の再建の時を稼ぐためにゴルバチョフ書記長はレーガン米大統領との首脳会談に応じ、SDIを牽制したのである。

ジュネーブ首脳会談後の十二月二十五日に開催されたソ連共産党政治局会議で、ゴルバチョフ書記長は、「核戦争勃発の脅威を少なくするために肯定的影響を与えた」と述べ、二十七日の最高会議では、「SDIに関しては米ソの立場は完全に喰い違った。米国が宇宙の軍事化にも、踏み切るならば、ソ連は米国の計画よりもかなり早く安い有効な対抗措置を見つけ出す、とレーガン大統領にはっきり伝えた」という報告演説を行った。

要するに、レーガンとの会談で、当面、核戦争の直接危機だけは引き延し、国内経済再建の時間をかせいだが、レーガンから挑まれた宇宙戦争への挑戦は受けて立たなければならぬ、と言うことなのである。

ソ連最高会議は、以上の米ソ関係を踏えて第十二次五ヶ年計画（一九八六～九〇年）の初年度である八六年の年次目標と国家予算を決定した。

ゴルバチョフは、八六年の国防費額を、百九十億六千三百万ルーブルに決めた。この額は、前年予算と同規模であるが、歳出総額に対する比率は四・六％で、前年比で〇・三％減少している。勿論、ソ連の国防費が歳出比四・六％というのは「公表」数字にすぎないことは周知の事実であるが、この「公表」数字も国際動向を可成り正確に反映するのである。六八年の「チェコ動乱」時には一五％増、八五年の戦域核配備では一二％増、七三年以降のデタント時代には横ばい状態が続いた。従って「公表」数字も横向性の指標として無視出来ない。

では、前年比〇・三％減という「公表」数字は何を意味するのであろうか。それは経済が軍事費を増額できない程に悪化し、ゴルバチョフが経済再建に集中せざるを得なくなったことを意味している。

ソ連最高会議に先立って、ゴルバチョフ書記長は、メーシャツ農業相を解任した。この人事は、政治権力が安定しなかったアンドロポフとチェルネンコの時代には着手できなかった農政改革に本腰で乗り出したことを意味していた。

ソ連の穀物生産は、七八年に二億三千五百トンの史上最高の豊作を記録して以降、七九～八〇年に一億七千万～一億八千万トン台に低落し、八一年からは恥かしくて収穫量の発表さえ出来ない有様であった。八五年の穀物生産量を最高会議で「一・五％の増加」と報告されただけで絶対数は発表できず、七年連続の不作を決定づけた。

この間、メーシャツは農相でありながら責任をとらなかったが、遂にゴルバチョフにトドメを刺されたのである。

ゴルバチョフ政権は、悪条件下でも最低二億トン、平常の条件で二億五千万トンの生産目標を掲げて農政改革を開始した。

ゴルバチョフの農政改革は、農業省、果実野菜省、畜村建設省、食肉乳業省、食品工業省の農業関連五省と、国家農業生産技術供給委員会という二つの国家委員会を、廃止して、国家農工委員会に統合する大規模なものである。

狙いは、複数の省庁に細分化された官僚行政を、政治局党中央官僚独裁の下に統制かつ管理し、科学技術を投入して末端機構を掌握し生産性を上げることにある。

中国「官僚制＝搾取国家」の郭小平路線が、党＝行政機関から農業経営を相対的に分離させ、家族を農村の経営単位として認めた上で「生産責任制」を採用した分権化の方向とは反対に、ゴルバチョフは、中央官僚の統制と管理を強化するスターリン型モデルを踏襲して、科学技術を投入する代償としてコルホーズとソホーズを締め上げ搾り上げるという路線を選択し、農業改革に乗り出したのである。

「禁酒令」と「聞酒令」は、スターリン型モデルを踏襲するゴルバチョフの管理統制主義を大衆的に表現したものであるが、ゴルバチョフの生産力主義が、スターリンと違う点は、科学と技術を極度に重視し、単純な倹喝と粉骨砕身にとどまらないということである。

ゴルバチョフ政権が打ち出した二千年までの長期発展計画を貫く思想も、現綱領を改訂した「ゴルバチョフ綱領」草案を貫く思想も、科学技術を基軸とした生産力主義である。即ち、科学技術の発展に依拠して生産効率と品質向上を計り、この近代的生産力主義を推進し得る党国家官僚と現場実働部隊の労働指揮官を固め、不適格な官僚とテクノクラートを解任し、現場労働者に規律を強制する方針なのである。

だが、この思想で組み立てられた二千年までの長期発展計画は、SDI重圧を受けるまでもなく失敗するであろう。

長期発展計画は、今後十五年で、労働生産性を現在の二・三～五倍、工業生産と国民所得を二倍にするという内容である。

しかし、科学技術と労働規律で労働生産性を高めるとしても、逆算すれば年間成長率が六％前後としてもなくては不可能であり、これまでの実績では七七年の四％が最高であるから達成は無理であろう。所得倍増の必要条件も年間平均成長率四・七％であるから困難である。

「フルシチョフ綱領」は、六一～七〇年の十年間で工業生産を二倍に増やして米国の工業生産水準を上廻り、七一～八〇年で米国の総工業生産高を遥かに引き離す、と書いて、今日改訂の憂き目をみているが、ゴルバチョフの計画も必ずや同様の運命をたどるであろう。また、ゴルバチョフ路線は、宇宙戦争計画の重圧で搾取と抑圧を強め、ソ連内階級闘争を呼び出すであろう。

中国人民の反「靖国」闘争の高揚と日帝の経済侵略反対闘争爆発

——『資本論』を捨てた鄧小平——

新年号の紙面
◎年頭論文…SDI核戦争と天皇攻撃と対決し階級深部の怒りの中から武装せよ！（1～2面）
◎三里塚特集　反対同盟各氏の年頭アピールと八六年二期決戦の勝利にむけて（3面）
◎寄せ場を出撃拠点に階級的労働運動を／八七年天皇沖縄上陸粉砕にむけて／階級的部落解放闘争の創出（4面）
◎Xデー攻撃計画を全面暴露し天皇闘争の最前線に蜂起派の旗を／連載・皇国史観の解体（5面）
◎十二・二二佐藤さん虐殺一ケ年糾弾・追悼報告／一・一七赤堀闘争に向けて／他（6面）

SDI核戦争と天皇攻撃と対決し階級深部の怒りの中から武装せよ！

一面から続く

九日に北京の学生数千が日帝侵略軍の華北侵略に抗してデモを組織し、国民党政府に対して共産党との内戦を終結させて抗日戦争へ決起せよと要求を突きつけた歴史的な運動である。八五年は五十周年に当り、学生と青年の全国決起が予想されたので、鄧小平政権は諸々の工作と弾圧に発出する一方、日帝独占に対する自粛と協力の要請を行ってきたのである。

十二月九日の決起は食い止められたが、路線の矛盾が存在する限り、人民の怒りを呼び出す基盤は無くならないのである。

遂に『資本論』を捨て去り近代経済学を採用するに至った中国共産党は、対外路線において、米ソ戦域核会談に対する態度の転倒がジュネーブの米ソ首脳会談へと縮約される過程で、軍事的には対米依存・経済的には対ソ交流で国益を追求する徹底した民族共産主義の「二股」外交を採用し、対内路線においては、日帝依存プラント輸入型重化学工業建設と沿岸都市に外資の「経済特区」を設定する対外開放政策と全国全都市全産業に競争原理に基づく市場メカニズムと生産責任制を適用する「経済改革」の三つの政策を採用、中国「官僚制＝搾取国家」を限りなく資本主義に近い制度へ接近させ続けてきたが、この路線それ自体が造り出す経済基盤が中国人民の不満と怒りを増幅させ、遂に、反日・反「蒋国」・反中曽根、そして「日帝の経済侵略反対」の闘いを呼び出したのである。

では、その路線と経済基盤の矛盾と人民の怒りの関係を具体的に分析しよう。

鄧小平路線の根底を流れるものは、帝国主義の資本と技術を導入して産業の基礎を固め、不平等原則で労働者と農民の労働意欲をかり立て、中国を経済的にも軍事的にも米ソに並ぶ超大国にすることにある。

その路線的表現が、米ソ「二股」外交であり、「四つの現代化」である。そしてその具体的方針が、日帝依存プラント輸入型重化学工業建設であり、請別強の自由投資を保障する沿海都市に設置する対外開放政策であり、人民のなかに富める者を育成して貧しき者を刺激し競争させて生産力を上げる生産責任制である。

この路線と方針を具体化すれば、必然的に、日帝独占の支配下で労働者が従属的に搾取され、日本製商品が氾濫し、貧富の差が拡大する。一方、貧困者が犯罪に手を染め、資産家と上層部の腐敗と堕落が拡大する。これでは、心ある人士の怒りや大衆の不満が噴出するのは当然であった。

既に、八五年九月の党代表会議で、鄧小平党顧問委主任と陳雲党規律検査委第一書記が、「対外開放政策と経済改革のスキ間をぬって、資本主義の腐敗した思想を持ち込んだり、不法行為で金もうけをする不正の風がはびこり始めた」と警告をせざるを得ないところまで来ていた。

そして、十二月十日、党と政府は、幹部に対する六項目の通達を出した。その内容は、①外国製乗用車の購入競争や豪華車への買い替え、②不必要な海外旅行、③公金遊覧旅行と宴会接待の禁止、④宴会や茶話会と贈答品の廃止、⑤正式な賃金以外の不正バイト収入、⑥地位と権力を利用した商売とワイロで儲ける幹部・配偶者・子女の増加、これらを清算しなければ司法機関で摘発し処分するというものだ。

「これが、中国「官僚制＝搾取国家」の今日的現実であり、鄧小平路線の物質化が必然的に生み出した結果である。

我々が繰り返し指摘した如く、この現実が鄧小平路線そのものが生み出した必然的な結果である以上、上部構造による粉飾を行おうとも、路線と路線がつくり出す社会的基盤そのものを断ち切らない限り、不正と腐敗、虚栄と差別、搾取と被搾取は、下部構造から生産され続け、不満と怒りを惹起し、階級闘争を噴出させるだろう。

我々は、この現実の中に、労働者国家がスタ宮によってカッコ付「労働者国家」に変質し、「官僚制＝搾取国家」にまで転落しようとも、過渡期世界が過渡期世界である限り、労働者・農民が必ずや決起するという我々アプトの路線的な正しさを確認することが出来、非資本主義国家を一国社会主義＝ブロック社会主義国家という公式で平板化して階級的成熟の可能性を否定する革共同の反スタ・マルクス主義と画然たる違いを確認しうるのである。

以上が中国に対する我々の見解である。

南朝鮮人民の階級的な闘い
民衆解放闘争と反帝闘争

光州蜂起五周年、「日韓条約」締結から二〇年目、外国人登録法の指紋押捻制度が実施されてから三〇年目にあたる一九八五年は、南朝鮮階級闘争がアメリカ帝国主義との闘いを鮮明に打ち出し、反共民主主義の枠を突破して進撃した年であった。

一月十一日、三菱バス（京畿道廣石）の運転手洪（ホン）ヨンウィ氏が、会社の不当解雇と接触事故による悲観を悲観して抗議の自殺を決行した。彼の自殺は、八四年のタクシー運転手朴鍾鳳（パク・ジョンマン）氏の焼身自殺に続いて、労働者や階級深部に深い衝撃を与えた。

それは、「韓国」のバス会社やタクシー会社が運転手を消耗品としてしか扱っていないからである。「韓国」で共産民衆と呼ばれている階級的底辺にタクシーやバスの運転手も組み敷かれており、誰も他人ごとだとは考えられなかったからである。

「会社には保険制度というものも無いのでしょうか。貧しい暮らしに思いもよらない衝撃をうけた父は、苦悩と挫折の中で最後の生涯をつみとる道を選びました」と三人の遺児は新聞社に訴えた。

一月十四日早朝、八ヶ所の会社で解雇された十名の労働者が、民韓党総裁室において「全員復職」「労働悪法改正」「ブラックリスト撤廃」「最低賃日給五百ウォン」「八時間労働」「労組弾圧中止」などを要求して断食籠城に突入した。

籠城六日目をむかえても野党民韓党総裁柳致松（ユ・チソン）は、選挙を理由に面接を拒否し、七日目に機動隊が支援部隊を強制進行した。

「韓国」の第十二代国会議員選挙は、こうした情勢の中で行われた。少数財閥を物質的階級的基盤とする全斗煥（チョン・ドファン）軍部反革命政権は、二・一二国会議員選挙で高い支持率を獲得し、形式的正統性を宣伝してソウル五輪にのぞむことを狙っていた。従って、公然たる官憲の介入と金権の乱舞する不正選挙となった。

だが、結果は、全斗煥の民正党が得票率で三五・三％しか獲得できず、野党の新民党の二九・二％と民韓党の一九・五％の合計数三八・七％を下廻り、形式的正統性を否定された。地方区議席では、民正党の八七に新民党の五〇と民韓党の二六が迫った。

即ち、この全学連の闘争路線の質的発展の背景には、「韓国」経済の借金経営による拡大と中産階層の発生、政府＝資本の労働組合運動に対する厳しい弾圧と基盤民衆の零落、二・一二国会選挙をめぐる新民党および反共民主主義の限界、という社会情勢の大きな変化があった。

反共民主主義と新民党の階級的限界が明らかになり、政府と資本が階級的労働運動家のブラックリストを作って狙い撃ちを始めた困難な情勢の下で、階級政党を持てぬ基盤民衆の苦悩と怒りは、全学連が担い闘い組織する以外なかったのである。

以上が八五年の南朝鮮階級闘争の発展と八六年闘争の方向である。

フィリピン政治動向は、アキノ裁判逃転判決、マルコス対コラソンの大統領選挙、新人民軍の攻勢で、八六年へ移行した。

比経済は、既に米帝を要とする国際通貨基金（IMF）の管理下にある。対外債務二百五十億ドルを抱え、全労働人口の四人に一人が失業し、経済成長率はASEAN最悪の八四年マイナス五・三％、八五年マイナス四・五％、生産活動の停滞と輸入の大幅減、米国フォード社など大外国資本の撤退続出、という惨憺たる状態にある。

新人民軍は、こうした中で政府さえ二万人を発表せざるを得ないほど増強され十五万人を数える。従って、この金学連の闘争路線の質的発展する。従って、防衛費による税負担は今後も増加の一途をたどり、特にプロレタリアート人民の生活に重圧を加える。

日本経済が、円高デフレと日米経済摩擦の圧迫で今までのような安定成長の途を断たれて低成長に転換した場合、プロレタリアート人民に対する防衛費の税負担は厳しいものとなざるを得ないであろう。

我々は、「中期防衛整備計画」の内容を大胆に政治暴露し、総力戦戦争体制の確立と対決しなければならない。

世界経済と日本経済の後退

経済企画庁が発表した八六年度の経済見通しによると、米帝が財政赤字を克服する方向に転じなければ、八六年度から世界経済の実質成長率は二％台へ先細りするという試算結果が出ている。

米国は、このままでは二年後に実質経済成長率が二％まで低落し、経常収支の赤字は八五年の千百四十億ドルから九百億ドルも増えて二千億ドルを突破し、世界経済の足を引っぱる。と予測している。

日本経済の八六年度見通しでは、三％台の低成長になると試算している。理由は、①八五年夏から景気が鈍化して底に転換点を迎えていたが、②九月旬以来の急激な円高（二〇％高）が中小輸出関連企業の経営を圧迫、③日銀の円高政策がデフレ効果を生み出しており、④米国経済も八六年の実質成長率が二・五～三％程度と予測されるからだと述べられている。

米議会は八五年十二月十二日に財政均衡法を可決した。同法は、財政赤字を現在の二千億ドルから八六年度千七百十九億ドルへ、八七年度千四百四十億ドルと減らし、以後毎年度三百六十億ドルずつ削減し、九九一年に赤字をゼロにすることを目標にしている。目標達成が出来ない時は歳出を削減カットする。カットの出率は国防と非国防を半々とするとなっている。

レーガンは同法案に署名して、「財政削減はもはや希望ではなく目標でもなくなった。しかし、SDIを実行すれば国防費は増大するはずだ」と述べられている。

同法の成功を信ずる者は誰一人なく、破産増税に落ち付くと皆が見ていると言う。

米帝の財政赤字二千億ドルの削減は挫折して米国経済は破滅への途をたどり、日帝をも捲き込むであろう。

日本資本主義の総需要（国内需要と輸出の合計）に占める貿易依存度は、高度成長期の一割弱から八〇年代半ばの二割へと高くなった。しかも、日帝が最も輸出した国米帝の輸出合計は、十年前の二〇％から八四年には三五％まで拡大した。日帝は膨大な対米貿易黒字の八割弱に相当する金額を米国に株や債券の形式で投資してきた。日帝は対米輸出で巨額のドルをつかみ、その分を金利の高い米国で運用して殖やし、二重に稼いでいる。その結果が、日米貿易摩擦として米帝の純債務国への転落である。そして遂にドル安・円高の時代へと転換せざるを得なくなり、レーガン路線の破産を数済するために日帝が円高不況に見舞われる結果となった。

それ故、日本経済の後退は、やがて基幹産業労働者の暴動をゆさぶり、ファシズムの風を吹き出すにはおかないだろう。

天皇在位六〇年式典を爆砕せよ

かくして、日帝・中曽根の八六年における国内攻撃の基軸は、戦後政治の総決算をかざしたファシズム攻撃となり、その攻撃内容は、天皇在位六〇年式典を転機とする天皇イデオロギーの大攻勢となる。

では、日帝・中曽根がふりかざす戦後政治の総決算とは、何を目指しているのか。それは大パリ、天皇イデオロギーで打ち固めたファシズム国家であり、「国民」の総てが「天皇陛下」と「大和民族」のために生命を捧げて戦争が出来るような国家体制をつくりあげることである。

即ち、天皇を人格的要とする天皇主義ファシズムの統治機構をもって対ソ核戦争を遂行できる総力戦戦争体制を確立することであり、具体的には、前述の日米安保体制下で対ソ核戦争を遂行する日帝独自の戦争体制に諸階級諸階層を天皇と大和民族の名において統合し動員することである。

それでは、天皇在位六〇年式典の政治的狙いは何か。

天皇在位六〇年式典は、戦後守勢に立たされて来た天皇主義者の攻勢転換の宣言であり、これまでの天皇主義者のイデオロギー攻撃の蓄積を糾合し、天皇主義者を総結集して全面攻撃に転じるための橋頭堡を構築せんとするファシズム攻撃である。

八六年天皇在位六〇年式典から八七年天皇沖縄上陸―沖縄「日の丸国体」に至る日帝の天皇イデオロギー攻撃は、戦後の新憲法に「天皇は国民統合の象徴である」と規定された象徴天皇を、ファシズムの時代に即した「大和民族と国家を統合する」天皇に仕上げ、天皇をファシズム国家体制のシンボルにせんがための大攻勢である。

そして、この一連の攻撃は、天皇イデオロギーによる「本土」支配の開始を橋頭堡として天皇の「日の丸」「君が代」で大和民族主義の下に蹂躙する攻撃であり、Xデーを頂点として射程におさめつつ連続的かつ計画的に仕掛けられたものである。

それ故、我々は、天皇在位六〇年式典粉砕闘争を、八六年天皇闘争の頂点にすえ、組織の総力を上げて貫徹する。だが、天皇在位六〇年式典攻撃がXデー攻撃を射程におさめた連続的かつ計画的な天皇イデオロギー攻撃の一環である限り、我々の闘いも八七年天皇沖縄上陸―沖縄「日の丸国体」に対する闘争と一体となった連続闘争として組織されなければならない。我々は必ずや「本土」闘争の沖縄解放を目指す沖縄人民との階級的団結を打ち固めて天皇闘争に連続的決起を勝ちとるであろう。

我々は、階級深部、山谷から天皇闘争の炎を吹きあげ、天皇と資本と軍力に屈服する基幹組織労働者の内部から魂をゆさぶり続け、山谷と共に天皇闘争を貫徹し得る階級的労働運動を構築する。

山谷は天皇闘争と日朝連帯と階級的労働運動の坩堝だ

全国四大寄せ場の流動的下層労働者は、八五年階級闘争の発展を天皇主義右翼＝皇誠会・西戸組との三年に亘る実力戦は、佐藤満夫氏虐殺という尊い犠牲をはらいながらも、遂に、山谷地区における西戸組事務所を閉鎖させて彼等を撤退に追い込むという二つの勝利を闘い取った。

八四年十二月二十二日、朝の寄せ場において西戸組と八三年から一年も続いた実力戦の緊迫した情況の中で、佐藤満夫監督は天皇主義右翼テロリスト間井の白刃に刺されて倒れた。爆発した山谷労働者の怒りは、西戸組と支援の浅香・マンモス交番に対する激しい報復戦をくりかえし、八四・八五越冬闘争の高揚で天皇主義者を山谷から叩き出し、ヤクザと一体化した警察の私服刑事と機動隊を何度も粉砕した。

八五年にも「建国記念日」の闘争をめぐって皇誠会＝西戸組との戦闘は続いた。

八五年四月七日、遂に、八二年に開設して以来、反革命拠点となって来た西戸組事務所は閉鎖した。しかし、天皇主義右翼登場の根である建設独占資本が警察と共に山谷支配を狙う限り、山谷が天皇主義右翼との攻防の最前線であることに変りは無かった。八五年の暮も、再び登場の機をうかがう西戸組幹部・軍司敏利ら三名を捕捉して三日を越える労働者が決起した。

そして四月、日雇金協・笹島の在日朝鮮人・權政河（コン・チョハ）さんが指紋押捺拒否闘争に決起した。

六月二十五～三十日、山谷命議団主催で權政河さんと拒否を決意した金（キム）さんを囲んで日朝労働者の連帯集会が行われた。そして二七日、金さんの押捺拒否闘争に共に決起した。三〇日には五名の在日朝鮮人も参加して実践を確めあった。

六月、全南愛（チョンナムゾン）さんが笹島から続いて押捺拒否に決起した。

この決起は、すなわち、在日朝鮮人労働者が流動的下層労働者の中から決起したということは、日朝プロレタリアートの階級的団結にとって決定的であった。

それは、階級深部と苦悩と怒りを共有するものだけが、日朝の民族の壁を突き破って血のかよった気持で結ばれることを実践で実証したからである。

民族が異なれば一朝一夕で信頼が得られるものでは決してない。ましてや、現実に朝鮮を植民地支配下に蹂躙し、朝鮮人を差別して来た日本帝国主義本国の支配的抑圧民族の立場にある日本人の底辺労働者が、搾取され抑圧され差別され虐殺されさえしてきた同胞の恨みと己の怨念を血に滲ませた朝鮮人の底辺労働者に、そんなに簡単に信頼されるはずはないのである。その困難な民族の壁を突き破った点に、この闘争の決定的意義があるのである。

日朝下層労働者に、真の階級的団結は獲得されて、国際主義は本物となるのである。

流動的下層労働者以外に、どこの組織労働者が、どこの党派が、この様な赤い血潮のよかった日朝労働者の階級的団結を勝ち取り得たであろうか。

我々は、八六年階級闘争に決起するにあたり、この闘いの意義の深さを何度も何度も確認し、旧来の小ブル急進主義の延長上にある戦闘主義との根底的な違いを組織思想として徹底させなければならない。

拠点としての流動的下層労働者の位置を明確にしなければならない。

既成の労働運動が、賃闘を打って全民労協の軍門に降伏し、労資協調から国家協調のファシズム労働運動に向い、国家の手先美が「天皇陛下万歳」の音頭をとる今日、階級的労働運動を担う山谷労働者の階級的任務は重大である。

社会党は、「君が代」を唱うのは資成できないが、「日の丸」は国旗として認めて掲揚すると言い出し、日共も「愛国の党」を宣言、排外主義潮流を形成した。

総評労働運動の「戦闘性」に期待をよせる「労研センター労組連」も、総評議長の黒川が天皇の招待で園遊会に出席したことを当然の如く受けとめている。

「労働者綱領」も構造改革路線であった。

動労革マルに至っては、国労民同を乗り越えて分割・民営化に積極的に協力した。

動労千葉だけが基幹労働者の中で唯一戦闘的立場を貫いて闘った。我々は動労千葉を激励し支援する。しかし、我々は階級的労働運動を構築し、労働者自身が階級的に決起する力を組織することが、動労千葉の労働者に応える途だと確信する。山谷闘争は労働者の階級性と革命性の体現である。

天皇沖縄上陸を断平許すな

「日の丸国体」を粉砕せよ

日帝・中曽根は、「日の丸・君が代」を沖縄人に強制し、「日の丸」を沖縄に上陸させて「日の丸国体」を挙行し、大和民族主義の下に沖縄人を蹂躙せんとしている。それは沖縄に対する「戦後政治の総決算」攻撃そのものであった。

七月二十日から「国体」リハーサルが「日の丸」掲揚と「君が代」斉唱を強制しながら開始された。このリハーサル大会は、各々の会場における県労協、高教組、地区労などによる「日の丸」「君が代」への抗議闘争の中で強行された。名護市の劇道会場では、開会式で「君が代」演奏は出しないという労組と市国体実行委の事前確認を一方的に踏みにじり、市の中止要請さえも拒否して「君が代」テープを流すという暴挙が強行された。しかし反対闘争で「日の丸」降納も「君が代」演奏も出来なかった。

八五年九月、日帝文部省は「日の丸・君が代」を強制する通達を出した。「国旗の掲揚や国家の斉唱を行わない学校があるので、その適切な取り扱いについて徹底すること」という行政命令である。

文部省の「日の丸・君が代」通達は、文部省の統治機構をもって対ソ核戦争を遂行する総力戦戦争体制を確立することであり、具体的には、前述の日米安保体制下で対ソ核戦争を遂行する日帝独自の戦争体制に諸階級諸階層を天皇と大和民族の名において統合し動員することである。

それでは、天皇在位六〇年式典の政治的狙いは何か。

天皇在位六〇年式典は、戦後守勢に立たされて来た天皇主義者の攻勢転換の宣言であり、これまでの天皇主義者のイデオロギー攻撃の蓄積を糾合し、天皇主義者を総結集して全面攻撃に転じるための橋頭堡を構築せんとするファシズム攻撃である。

八六年天皇在位六〇年式典から八七年天皇沖縄上陸―沖縄「日の丸国体」に至る日帝の天皇イデオロギー攻撃は、戦後の新憲法に「天皇は国民統合の象徴である」と規定された象徴天皇を、ファシズムの時代に即した「大和民族と国家を統合する」天皇に仕上げ、天皇をファシズム国家体制のシンボルにせんがための大攻勢である。

そして、この一連の攻撃は、天皇イデオロギーによる「本土」支配の開始を橋頭堡として天皇の「日の丸」「君が代」で大和民族主義の下に蹂躙する攻撃であり、Xデーを頂点として射程におさめつつ連続的かつ計画的に仕掛けられたものである。

それ故、我々は、天皇在位六〇年式典粉砕闘争を、八六年天皇闘争の頂点にすえ、組織の総力を上げて貫徹する。だが、天皇在位六〇年式典攻撃がXデー攻撃を射程におさめた連続的かつ計画的な天皇イデオロギー攻撃の一環である限り、我々の闘いも八七年天皇沖縄上陸―沖縄「日の丸国体」に対する闘争と一体となった連続闘争として組織されなければならない。我々は必ずや「本土」闘争の沖縄解放を目指す沖縄人民との階級的団結を打ち固めて天皇闘争に連続的決起を勝ちとるであろう。

我々は、階級深部、山谷から天皇闘争の炎を吹きあげ、天皇と資本と軍力に屈服する基幹組織労働者の内部から魂をゆさぶり続け、山谷と共に天皇闘争を貫徹し得る階級的労働運動を構築する。

山谷は天皇闘争と日朝連帯と階級的労働運動の坩堝だ

全国四大寄せ場の流動的下層労働者は、八五年階級闘争に偉大な貢献をした。

山谷における天皇主義右翼＝皇誠会・西戸組との三年に亘る実力戦は、佐藤満夫氏虐殺という尊い犠牲をはらいながらも、遂に、山谷地区における西戸組事務所を閉鎖させて彼等を撤退に追い込むという二つの勝利を闘い取った。

八四年十二月二十二日、朝の寄せ場において西戸組と八三年から一年も続いた実力戦の緊迫した情況の中で、佐藤満夫監督は天皇主義右翼テロリスト間井の白刃に刺されて倒れた。爆発した山谷労働者の怒りは、西戸組と支援の浅香・マンモス交番に対する激しい報復戦をくりかえし、八四・八五越冬闘争の高揚で天皇主義者を山谷から叩き出し、ヤクザと一体化した警察の私服刑事と機動隊を何度も粉砕した。

八五年にも「建国記念日」の闘争をめぐって皇誠会＝西戸組との戦闘は続いた。

八五年四月七日、遂に、八二年に開設して以来、反革命拠点となって来た西戸組事務所は閉鎖した。しかし、天皇主義右翼登場の根である建設独占資本が警察と共に山谷支配を狙う限り、山谷が天皇主義右翼との攻防の最前線であることに変りは無かった。八五年の暮も、再び登場の機をうかがう西戸組幹部・軍司敏利ら三名を捕捉して三日を越える労働者が決起した。

そして四月、日雇金協・笹島の在日朝鮮人・權政河（コン・チョハ）さんが指紋押捺拒否闘争に決起した。

六月二十五～三十日、山谷命議団主催で權政河さんと拒否を決意した金（キム）さんを囲んで日朝労働者の連帯集会が行われた。そして二七日、金さんの押捺拒否闘争に共に決起した。三〇日には五名の在日朝鮮人も参加して実践を確めあった。

日帝の八六年攻撃動向と我が同盟の国際的任務

八六年における日本帝国主義の基本的な攻撃動向は、①宇宙核戦争時代の扉を開く純侵略国に転落して侵略に苦しむ米帝に代って突出し、②北に対し核戦争の布陣を固めつつ東南アジアの新植民地支配を強化する核総力戦戦争体制の確立を計り、③戦後政治の総決算を掲げてファシズム統治機構の確立を急ぎ、世界経済の底ち込みと日本経済の停滞に伴う階級闘争の高揚を制圧せんとし、④天皇在位六〇年式典攻撃と八七年沖縄「日の丸国体」―天皇沖縄上陸攻撃をもって、天皇主義ファシズムによる「本土」制圧と沖縄蹂躙を完成せんとする計画、これである。

SDIサミットを粉砕せよ

米ソ戦域核合撃体制が、米ソの経済破綻を背景として、ジュネーブ首脳会談へと凝縮される過程で、米帝のSDI（戦略防衛構想）が既成事実化することとなり、所謂スターウォーズ計画が帝国主義諸列強の中心的課題として浮び上がった。

即ち、SDIは、対ソ軍事優位の夢を捨て切れない米帝が、唯一、技術面で対ソ優位を保持し得ている先端技術を駆使して、ゴルバチョフ体制に挑戦をいどむ闘争であり、従って、米帝が資本主義陣営の覇主としての誇りと威地をかけて対ソ連に挑む最後の競争である。

しかし、米国経済は純債務国（借金国）に転落してドル安政策へ転換せざるを得ないほど惨憺たる状態にあるため、その誇りも裏付けのない虚栄でしかなく、莫大な資金を喰うSDIのツケは諸列強とりわけ日帝に廻ってくる構造になっている。

こうした情勢下で開催されるSDIサミットは、当然、SDIサミットとなりざるを得ない。つまり、米帝のSDI計画に諸列強が参加と支持を表明してジュネーブ後の対ソ団結を示すのが目的となるのである。

即ち、東京サミットは、帝国主義諸列強が「レーガンの戦略防衛構想（SDI）」に対して支持と参加を表明し、ゴルバチョフに対して帝国主義諸列強の団結を誇示することが表向きの目的となり、SDIサミットになるのである。

勿論その舞台裏では、純債務国へ転落したドル安へ転換した後の米国経済の破綻を如何にして破滅から救い、低迷と後退し続ける世界経済に如何に対応するのか、という深刻な問題が討議される。

マルコスは、遂に「人民の総蜂起が勃発した場合、国軍だけでは対応できない。米軍の支援を要請する」と弱音を吐いた。

レーガンは、「新人民軍を甘く見れば比国は第二のイランになる」と警告し、マルコスの代りを求める感触さえ臭わせた。

八五年十一月四日、マルコスは、八七年予定の大統領選を八六年二月七日投票に繰り上げた。これは、時がたつ程不利になるので早期に暗黒選挙を行って政権にしがみつき、米帝と日帝の軍事経済援助をつなぎとめようとする思惑があきであった。

十二月二日、公務員犯罪特別裁判所は、真相究明委員会の報告が犯人とした二六人を全員無罪とし、軍が射殺したガルマンを犯人と断定する逆転判決を行った。これもマルコスの弱さを示す悪あがきであった。

だが、米帝と日帝は、コラソン大統領とラウレル副大統領でも良いのである。コラソンはココナッツ産業を独占するコハンコ財閥の令嬢、ラウレルの父は日帝占領下の大統領であり、二人は米軍基地の撤廃も日米資本の撤退も要求せず、新人民軍の敵である。

フィリピン階級闘争は大統領選の結果に拘らず八六年に大きく飛躍するだろう。

マルコスは、遂に「人民の総蜂起が勃発した場合、国軍だけでは対応できない。米軍の支援を要請する」と弱音を吐いた。

レーガンは、「新人民軍を甘く見れば比国は第二のイランになる」と警告し、マルコスの代りを求める感触さえ臭わせた。

八五年十一月四日、マルコスは、八七年予定の大統領選を八六年二月七日投票に繰り上げた。これは、時がたつ程不利になるので早期に暗黒選挙を行って政権にしがみつき、米帝と日帝の軍事経済援助をつなぎとめようとする思惑があきであった。

既に、八五年九月の党代表会議で、鄧小平党顧問委主任と陳雲党規律検査委第一書記が、「対外開放政策と経済改革のスキ間をぬって、資本主義の腐敗した思想を持ち込んだり、不法行為で金もうけをする不正の風がはびこり始めた」と警告をせざるを得ないところまで来ていた。

そして、十二月十日、党と政府は、幹部に対する六項目の通達を出した。その内容は、①外国製乗用車の購入競争や豪華車への買い替え、②不必要な海外旅行、③公金遊覧旅行と宴会接待の禁止、④宴会や茶話会と贈答品の廃止、⑤正式な賃金以外の不正バイト収入、⑥地位と権力を利用した商売とワイロで儲ける幹部・配偶者・子女の増加、これらを清算しなければ司法機関で摘発し処分するというものだ。

「これが、中国「官僚制＝搾取国家」の今日的現実であり、鄧小平路線の物質化が必然的に生み出した結果である。

我々が繰り返し指摘した如く、この現実が鄧小平路線そのものが生み出した必然的な結果である以上、上部構造による粉飾を行おうとも、路線と路線がつくり出す社会的基盤そのものを断ち切らない限り、不正と腐敗、虚栄と差別、搾取と被搾取は、下部構造から生産され続け、不満と怒りを惹起し、階級闘争を噴出させるだろう。

我々は、この現実の中に、労働者国家がスタ宮によってカッコ付「労働者国家」に変質し、「官僚制＝搾取国家」にまで転落しようとも、過渡期世界が過渡期世界である限り、労働者・農民が必ずや決起するという我々アプトの路線的な正しさを確認することが出来、非資本主義国家を一国社会主義＝ブロック社会主義国家という公式で平板化して階級的成熟の可能性を否定する革共同の反スタ・マルクス主義と画然たる違いを確認しうるのである。

以上が中国に対する我々の見解である。

南朝鮮人民の階級的な闘い
民衆解放闘争と反帝闘争

光州蜂起五周年、「日韓条約」締結から二〇年目、外国人登録法の指紋押捺制度が実施されてから三〇年目にあたる一九八五年は、南朝鮮階級闘争がアメリカ帝国主義との闘いを鮮明に打ち出し、反共民主主義の枠を突破して進撃した年であった。

一月十一日、三菱バス（京畿道廣石）の運転手洪（ホン）ヨンウィ氏が、会社の不当解雇と接触事故による悲観を悲観して抗議の自殺を決行した。彼の自殺は、八四年のタクシー運転手朴鍾鳳（パク・ジョンマン）氏の焼身自殺に続いて、労働者や階級深部に深い衝撃を与えた。

それは、「韓国」のバス会社やタクシー会社が運転手を消耗品としてしか扱っていないからである。「韓国」で共産民衆と呼ばれている階級的底辺にタクシーやバスの運転手も組み敷かれており、誰も他人ごとだとは考えられなかったからである。

「会社には保険制度というものも無いのでしょうか。貧しい暮らしに思いもよらない衝撃をうけた父は、苦悩と挫折の中で最後の生涯をつみとる道を選びました」と三人の遺児は新聞社に訴えた。

一月十四日早朝、八ヶ所の会社で解雇された十名の労働者が、民韓党総裁室において「全員復職」「労働悪法改正」「ブラックリスト撤廃」「最低賃日給五百ウォン」「八時間労働」「労組弾圧中止」などを要求して断食籠城に突入した。

籠城六日目をむかえても野党民韓党総裁柳致松（ユ・チソン）は、選挙を理由に面接を拒否し、七日目に機動隊が支援部隊を強制進行した。

「韓国」の第十二代国会議員選挙は、こうした情勢の中で行われた。少数財閥を物質的階級的基盤とする全斗煥（チョン・ドファン）軍部反革命政権は、二・一二国会議員選挙で高い支持率を獲得し、形式的正統性を宣伝してソウル五輪にのぞむことを狙っていた。従って、公然たる官憲の介入と金権の乱舞する不正選挙となった。

だが、結果は、全斗煥の民正党が得票率で三五・三％しか獲得できず、野党の新民党の二九・二％と民韓党の一九・五％の合計数三八・七％を下廻り、形式的正統性を否定された。地方区議席では、民正党の八七に新民党の五〇と民韓党の二六が迫った。

即ち、この全学連の闘争路線の質的発展の背景には、「韓国」経済の借金経営による拡大と中産階層の発生、政府＝資本の労働組合運動に対する厳しい弾圧と基盤民衆の零落、二・一二国会選挙をめぐる新民党および反共民主主義の限界、という社会情勢の大きな変化があった。

反共民主主義と新民党の階級的限界が明らかになり、政府と資本が階級的労働運動家のブラックリストを作って狙い撃ちを始めた困難な情勢の下で、階級政党を持てぬ基盤民衆の苦悩と怒りは、全学連が担い闘い組織する以外なかったのである。

以上が八五年の南朝鮮階級闘争の発展と八六年闘争の方向である。

フィリピン政治動向は、アキノ裁判逃転判決、マルコス対コラソンの大統領選挙、新人民軍の攻勢で、八六年へ移行した。

比経済は、既に米帝を要とする国際通貨基金（IMF）の管理下にある。対外債務二百五十億ドルを抱え、全労働人口の四人に一人が失業し、経済成長率はASEAN最悪の八四年マイナス五・三％、八五年マイナス四・五％、生産活動の停滞と輸入の大幅減、米国フォード社など大外国資本の撤退続出、という惨憺たる状態にある。

新人民軍は、こうした中で政府さえ二万人を発表せざるを得ないほど増強され十五万人を数える。従って、この金学連の闘争路線の質的発展する。従って、防衛費による税負担は今後も増加の一途をたどり、特にプロレタリアート人民の生活に重圧を加える。

日本経済が、円高デフレと日米経済摩擦の圧迫で今までのような安定成長の途を断たれて低成長に転換した場合、プロレタリアート人民に対する防衛費の税負担は厳しいものとなざるを得ないであろう。

我々は、「中期防衛整備計画」の内容を大胆に政治暴露し、総力戦戦争体制の確立と対決しなければならない。

世界経済と日本経済の後退

経済企画庁が発表した八六年度の経済見通しによると、米帝が財政赤字を克服する方向に転じなければ、八六年度から世界経済の実質成長率は二％台へ先細りするという試算結果が出ている。

米国は、このままでは二年後に実質経済成長率が二％まで低落し、経常収支の赤字は八五年の千百四十億ドルから九百億ドルも増えて二千億ドルを突破し、世界経済の足を引っぱる。と予測している。

日本経済の八六年度見通しでは、三％台の低成長になると試算している。理由は、①八五年夏から景気が鈍化して底に転換点を迎えていたが、②九月旬以来の急激な円高（二〇％高）が中小輸出関連企業の経営を圧迫、③日銀の円高政策がデフレ効果を生み出しており、④米国経済も八六年の実質成長率が二・五～三％程度と予測されるからだと述べられている。

米議会は八五年十二月十二日に財政均衡法を可決した。同法は、財政赤字を現在の二千億ドルから八六年度千七百十九億ドルへ、八七年度千四百四十億ドルと減らし、以後毎年度三百六十億ドルずつ削減し、九九一年に赤字をゼロにすることを目標にしている。目標達成が出来ない時は歳出を削減カットする。カットの出率は国防と非国防を半々とするとなっている。

レーガンは同法案に署名して、「財政削減はもはや希望ではなく目標でもなくなった。しかし、SDIを実行すれば国防費は増大するはずだ」と述べられている。

同法の成功を信ずる者は誰一人なく、破産増税に落ち付くと皆が見ていると言う。

米帝の財政赤字二千億ドルの削減は挫折して米国経済は破滅への途をたどり、日帝をも捲き込むであろう。

日本資本主義の総需要（国内需要と輸出の合計）に占める貿易依存度は、高度成長期の一割弱から八〇年代半ばの二割へと高くなった。しかも、日帝が最も輸出した国米帝の輸出合計は、十年前の二〇％から八四年には三五％まで拡大した。日帝は膨大な対米貿易黒字の八割弱に相当する金額を米国に株や債券の形式で投資してきた。日帝は対米輸出で巨額のドルをつかみ、その分を金利の高い米国で運用して殖やし、二重に稼いでいる。その結果が、日米貿易摩擦として米帝の純債務国への転落である。そして遂にドル安・円高の時代へと転換せざるを得なくなり、レーガン路線の破産を数済するために日帝が円高不況に見舞われる結果となった。

それ故、日本経済の後退は、やがて基幹産業労働者の暴動をゆさぶり、ファシズムの風を吹き出すにはおかないだろう。

天皇在位六〇年式典を爆砕せよ

かくして、日帝・中曽根の八六年における国内攻撃の基軸は、戦後政治の総決算をかざしたファシズム攻撃となり、その攻撃内容は、天皇在位六〇年式典を転機とする天皇イデオロギーの大攻勢となる。

では、日帝・中曽根がふりかざす戦後政治の総決算とは、何を目指しているのか。それは大パリ、天皇イデオロギーで打ち固めたファシズム国家であり、「国民」の総てが「天皇陛下」と「大和民族」のために生命を捧げて戦争が出来るような国家体制をつくりあげることである。

即ち、天皇を人格的要とする天皇主義ファシズムの統治機構をもって対ソ核戦争を遂行できる総力戦戦争体制を確立することであり、具体的には、前述の日米安保体制下で対ソ核戦争を遂行する日帝独自の戦争体制に諸階級諸階層を天皇と大和民族の名において統合し動員することである。

それでは、天皇在位六〇年式典の政治的狙いは何か。

天皇在位六〇年式典は、戦後守勢に立たされて来た天皇主義者の攻勢転換の宣言であり、これまでの天皇主義者のイデオロギー攻撃の蓄積を糾合し、天皇主義者を総結集して全面攻撃に転じるための橋頭堡を構築せんとするファシズム攻撃である。

八六年天皇在位六〇年式典から八七年天皇沖縄上陸―沖縄「日の丸国体」に至る日帝の天皇イデオロギー攻撃は、戦後の新憲法に「天皇は国民統合の象徴である」と規定された象徴天皇を、ファシズムの時代に即した「大和民族と国家を統合する」天皇に仕上げ、天皇をファシズム国家体制のシンボルにせんがための大攻勢である。

そして、この一連の攻撃は、天皇イデオロギーによる「本土」支配の開始を橋頭堡として天皇の「日の丸」「君が代」で大和民族主義の下に蹂躙する攻撃であり、Xデーを頂点として射程におさめつつ連続的かつ計画的に仕掛けられたものである。

それ故、我々は、天皇在位六〇年式典粉砕闘争を、八六年天皇闘争の頂点にすえ、組織の総力を上げて貫徹する。だが、天皇在位六〇年式典攻撃がXデー攻撃を射程におさめた連続的かつ計画的な天皇イデオロギー攻撃の一環である限り、我々の闘いも八七年天皇沖縄上陸―沖縄「日の丸国体」に対する闘争と一体となった連続闘争として組織されなければならない。我々は必ずや「本土」闘争の沖縄解放を目指す沖縄人民との階級的団結を打ち固めて天

「農地死守・実力闘争」の旗高く86年二期決戦へ！

東峰三被告を守り抜き、3・30全国闘争へ

二期―用水決戦の実力決起を

侵略反革命軍事空港解体の火柱を打ち立てよ

全国の同志・友人諸君！『蜂起』読者のプロレタリアート人民の皆さん！

八六年の幕明けにあたって決定的な正念場＝本格的二期着工攻撃を迎えんとする三里塚の地へ、わが共産同蜂起派の真紅の隊列に一戦士として結集し、共に激闘の二期決戦へと馳せ参じられんことを、厳粛に、かつ声を大にしてまず訴えるものである。

日帝・中曽根は、既に八五年末に、二期本格着工を宣言し、その突破口として、成田用水・警備―資材道路（木の根～横堀間）・第二ターミナルビル・駐車場の建設・着工を具体化するに至っている。「九〇年二期完成」に向けられた日帝の侵略反革命軍事空港建設が、八〇年代後期の核総力戦戦争体制の確立攻撃と軌を一にするものであることは、今更論じるまでもないだろう。問題は、この日帝の八〇年代後期の戦略的総路線の下に打ち下される二期攻撃と如何に対決していくのか、という一点にこそある。就中、革命党・革命勢力が、プロレタリアート人民決起の出撃環として、三里塚実力戦闘への領導を、如何に果たしていくのか、ということである。

その為に、八六年の年頭に際して、八五年二期―用水決戦の勝利的日々を今一度確認するとともに、「農地死守・実力闘争」の不撓不屈の三里塚闘争精神を発揮して全国へと檄を発する三里塚芝山連合空港反対同盟各氏の年頭アピールを肝に銘じ、我がものとして、八六年三里塚二期決戦勝利・侵略反革命軍事空港解体戦へと攻め登る方途を共に確信しようではないか！

三里塚闘争二〇年の真髄を今こそ発揮して、八六年三里塚闘争の怒濤の進撃を共に勝ち取られ！

「農地死守・実力闘争」の真価を発揮―85年

八五年三里塚闘争を一言で要約すれば、三里塚闘争二〇年に亘る「農地死守・実力闘争」の真価を発揮し、実力戦闘をもって勝利した、ということである。

換言すれば、「農地死守・実力闘争」をもってしか二期―用水決戦の勝利は有り得ないということを、今更ながらも鮮明に、実力戦闘という物質力をもって指し示した、ということである。

言うまでもなく、八六年闘争は、これを引き継ぎ、かつ拡大・発展せしむるものとして、同時に、我が蜂起派の真紅の隊列をかかる戦闘過程で飛躍せしめるものとして、貫徹せねばならない。

八五年三里塚闘争の経緯は概要以下の通りである。

八四年末から開始された二期敷地内天神峰における表土はぎとり―代替地への移送阻止連続闘争を突破口に火蓋を切った八五年闘争は、三波（二・二二→二・二七→三・六）に亘る東峰十字路公判最終弁論十葉地裁包囲・糾弾闘争を脱落派の敵対を踏みしだき炸裂せしめ、三・二四現地全国闘争（一万五千）を戦取する。四月以降、成田用水辺田・中郷着工阻止の菱田現地闘争が、文字通り連日連夜貫徹される中、五・二六現地全国闘争（一万二千）を戦取、東峰十字路公判重罪攻撃粉砕の「十万人署名・一千万円カンパ」運動を全国で組織しつつ秋期九・一六―十・二〇闘争へと攻め登り十一・二五用水着工以降の連続決起へと導かれる。その間、現地支援勢力による木の根及び天神峰にかけた連続闘争も恒常的に蓄積されていく。まさに、日々、闘争の連続である。

日帝は、八五年にあたって「今年に公団の子どもがかかっている」（公団副総裁松本）と嘯き、四月以降、公団・警備の組織体制を、いわば「二期執行体制」とも呼ぶべき組織再編に着手、一方で「成田は、いま」なるテマゴキー二期推進キャンペーン（四月七日付政府広報）を捏造し、七月一日、「成田空港騒音指定区域」（第一種）を告示、八月二八日、「五空整」（第五次空港整備五ヶ年計画）と八六年度運輸省予算概算要求を発表し、三里塚二期予算としても五年間で四二〇億円を計上、九〇年二期工区（B・C滑走路）供用開始を宣言、中曽根は、十一月末、年内本格着工を捲し立てた。

最早、二期決戦情勢は、一刻の猶予もなく、緊迫性を帯びた段階へと突入しているのである。

故に、そ、八五年激闘の地平から二期決戦勝利の不抜の方途を血肉化し、陣形として築きとげねばならないのだ。

その第一は、「農地死守・実力闘争」である。

我々は、三里塚闘争の基本路線、「農地死守・実力闘争」を推し貫く時に、そ、プロレタリア的団結が形成され、三里塚闘争を、如何なる陣形と路線で貫徹するのか、ということにある。つまり、階級深部と固結する労農同盟の陣形と目帝打倒・安保粉砕の路線をもって「農地死守・実力闘争」を推し貫く時に、そ、プロレタリア的団結が形成され、三里塚闘争を、日本階級闘争の雄と言わせしめる、ということである。八五年闘争は、いみじくも証を実践した。

一つは、敷地内天神峰・東峰の反対同盟を先頭に闘い抜かれた表土移送阻止闘争であり、かつ、この敷地内農民と万ッチリ結合した菱田反対同盟を先頭とする成田用水粉砕闘争である。〝農地を武器〟として、これを闘争拠点として構えた両闘争は、その不抜の戦闘精神をもってプロレタリア的団結の形成拠点として培われる一方で、現地実力戦闘の敢行を切り拓く水路となったのである。即ち、天皇主義右翼と実力対決する山谷・笹島をはじめとする全国寄せ場の流動的下層労働者の連続蜂起を現代の労農同盟の物質化の端緒として刻印し、三里塚を闘う労働者の会」の現地登場を切り拓き、他方、様拡とファシズムに突撃する日帝の満を持した厳戒体制を突破し、十・二〇三里塚第一公団を出撃点とした人民の実力戦闘～用水決戦を頂点とする日帝・国家権力との激突を領導する。この「農地死守・実力闘争」に牽引された八五年三里塚闘争は、七〇年代初期の第二期武装闘争の敗北以降の「封じ込められた軍事」の壁の只中で、ハファシズムと核戦争〜への日帝からする突撃に対し、プロレタリア政治路線で武装して三里塚・山谷・沖縄を出撃拠点にプロレタリアート人民の怒りを組織して日帝打倒へ邁進せよ！という我が路線の正しさをも明白なものとするのである。

第二は、東峰十字路公判重罪求攻撃に見られる反対同盟解体のファシズム攻撃の激化であり、成田用水事業の度重なる破産の中で蠢動を繰り返した天皇主義右翼の存在である。ここには、日帝との最尖端攻防を形成する三里塚闘争の日本階級闘争に占めるべき日本階級闘争の構図の縮図が凝縮しているのである。

即ち反対同盟―三里塚闘争解体策動は、直接的には二期強行着工に向けて打ち下されつつも、その背景に革命党・革命勢力壊滅の展望をも有して命懸けで仕掛けられているのである。

日帝のファシズム攻撃の軍門に甚振労働運動をはじめとした多くの勢力が右根雲日和見主義を全面露呈させて屈服に拍車をかけている今日、三里塚勢力は、〝階級闘争の源源地〟として日帝・国家権力の僧悪的なのである。ここに、ファシストの跳梁が引きだされる根拠もあるのだ。

であるならば、我々は、階級的僧悪の怒りを赤々と煮えたぎらせ、眼前の機動隊殲滅から帝国主義国家権力打倒の陣形を「農地死守・実力闘争」の陣形に結合せしめ、その勝利の中に三被告防衛―東峰十字路公判闘争勝利を刻印し、もって三里塚闘争解体のファシズム攻撃を打ち破るのみなのである。

第三に、脱落派の解体なくして勝利もまたないことが、今更ながらも鮮明に描き出された、ということである。

表土移送阻止闘争から完全逃亡し、東峰十字路公判―最終弁論に敵対し、用水闘争に アリバイ的介入をはかった脱落派は、そもそも「農地死守・実力闘争」に唾をはきかけ「二期ない論」を捲し立てて その内懐に用水推進派を抱えこんで八三年「三・八分裂」を強行したのである。本質的には、日帝の三里塚闘争破壊の天皇主義ファシズム攻撃に屈服し、遵走した彼等が、三里塚二期―用水決戦の極悪物へと化していることは、最早論を見ない。

現地連続闘争を実力戦闘として炸裂せしめ、日帝・中曽根による二期本格着工を、有りとあらゆる手段を駆使して阻止することである。勿論、実態的な二期工事を、各所において破砕するとともに、これと呼応して日帝の重心を賭した三里塚闘争解体策動―本年第一に、我が政治路線＝三里塚・山谷・沖縄から出撃し日帝を打倒せよ！という今日的な日本階級闘争の最尖端攻防環を一革命戦士として担うことを意味する。同時に、第二に、かかる闘いの質を全戦線に普遍化するという意味において、八〇年代後期の階級激突を革命勢力の側から戦取していくということである。あえて、付言すれば、この二つの意味を相互に結合・循環させることが、我々の言う〝日帝打倒の戦略的総路線闘争と結合した三里塚二期―用水決戦〟なのである。

そして、八五年実力戦闘の地平を担った確信をもって、二期決戦勝利・侵略反革命軍事空港解体戦闘を我が蜂起派こそが担うのだという気迫と確信を込めて、階級的共同闘争の砦たる三里塚の更なる全国布陣―戦闘布陣の形成をその只中から構築する決意を込めて、建党建軍＝非合法体制十余年の実績をもつ蜂起派党建設に邁進しようではないか！

「農村死守・実力闘争」の旗幟をも鮮明に闘い抜く反対同盟と共に、八六年三里塚闘争の勝利の金字塔を我が手に握ろうではないか！

用水着工に菱田反対同盟先頭に怒りの決起
（写真は抗議闘争を闘う辺田・秋葉恵美子さん―11月27日）

蜂起派と共に三里塚闘争へ

反帝戦線三里塚現地闘争駐屯隊

「九〇年に供用開始」を豪語している。しかし、これは机上の空論にすぎない。日帝が何度も試みた敷地内切り崩しのキャンペーンにしかすぎない。そこで、二期工区内公団用地から、空港関連施設工事が開始されたとしても、「完成」の見込みなど全くないのだ。

日帝は、まず、二期本格着工の手始めに、横風用滑走路（C滑走路）の外沿の道路―木の根・横堀間の資材・警備道路に着手せんとしている。そして、二期工区内の駐車場・第二ターミナルビル建設を目論んでいる。既に大手業者が内定し、準備は完了している。これら二期本格着工を粉砕するものとして、我々は、成田用水（辺田・中郷地区）を粘り強い闘いでもって粉砕しなければならない。

八五年十一月二五日に、全国動員二万名の機動隊を投入したものである。横風用の強権に対し私達は収用法の規定を誠実に守ったために権力は我々の土地を取ることも、事実上失効して不可能になってしまったのが現状である。これらの行き詰りを打開するために成田用水を強行してきた。だが用水は我が反対同盟の田の存在によって不完全なものでしかなくなっている。

八六年は権力・公団が二期工事を放棄することを明らかにしなければならない年だ。

これを明らかにするために、収用裁決等権限不存在訴訟および二期工事差し止め訴訟公判を行っている。二期工事の差し止めについては、完成の見通しがなく二期を進めようとすることは我々の生存権の侵害と税金の浪費である。一切の工事を中止せよ。反対同盟の正義の闘いを明らかにして八六年を勝利の年とする。

三里塚の闘いは日本の民主主義の存亡にかかわる大切な闘争である。

（駐屯隊通信は次面に掲載）

用水闘争が炸裂！

反対同盟決起に応え用水粉砕連続闘争に起つ！（11月27日菱田）

八五年用水闘争は、菱田反対同盟を先頭に「農地死守・実力闘争」の旗幟をも鮮明に闘い抜かれ、八六年二期決戦の勝利の展望を切り拓いた。

日帝・国家権力は、菱田工区辺田・中郷の用水工事着工にあたって、十一月二三日、「成田用水菱田工区着工阻止闘争警備本部」（警備本部長・千葉県警本部長菊岡平八郎）を設置、もって、全国から二万人もの機動隊を動員、菱田を厳戒体制におき、反対同盟と支援勢力による用水着工実力粉砕闘争を封じ込めんとし、更には、強行着工の二五日の明け方に至るまで、着工を極秘にするという暴挙に出た。

だが、この暴挙は、成田用水の本質が、反対同盟二期敷地内外の分断―空港粉砕闘争の解体を目論む、文字通り二期着工の突破口以外の何者でもないことを自己暴露するとともに、知って、全国プロレタリアート人民の怒りの炎に油を注ぐだけとなったのである。菱田工区辺田・中郷の千六名には、用水絶対反対の反対同盟が各所に、闘争拠点として築立している。七八年「二期工区暫定開港」の強行以降、用水推進派を尖兵として反対同盟の解体・懐柔を目論み、用水をアメにして奔走し続けても、辺田・中郷地区の用水導入田は六割にしか充たなかったのである。即ち、我が反対同盟がある限り用水事業の完了などと有り得ようはずもなく、ましてや、「二期完成―九〇年供用開始」など絶対に有り得ないのだ。

菱田反対同盟先頭に、なぜ敢えて公団が補助金を上乗せして用水をもって来たか。これこそ敷地内外の分断、反対同盟の破壊・解体以外の何ものでもない。反対同盟の田が存在している限り、菱田工区の完成はあり得ない。日帝は十一月二五日から九千百名の機動隊を導入し成田用水を強行着工した。四割もの農民が反対している中、完成などあり得ない。

公団は二期工事に向けて用地内との話し合いと一方で言いながら、一昨年ヘリコプターで敷地内へ牧草種を散布した。我々の営農を妨害した。公団・秋富は「自分達が所有している土地に対して第三者が干渉する必要はない。」と現在我々は二期に手をつけることを宣言した。それらは我々の土地も政府・公団が干渉するものではない。一指も触れさせはしない。現在我々は収用裁決等権限不存在確認訴訟および二期工事差し止め訴訟公判を行っている。裁判闘争と同時に、土地を絶対に手放さない立場を貫き、八六年決戦に勝利する。三里塚への結集と反対同盟への支援をお願いする。

反対同盟が年頭アピール

勝利の86年を！

三里塚芝山連合空港反対同盟委員の年頭アピールを掲載する。日帝・中曽根による二期本格着工と敢然と対決する反対同盟の労農同盟打ち固め、いざ起たん！八六年三里塚二期―用水決戦の勝利へ！ 同盟の檄に応え進撃せん！

（編集局）

二期決戦の勝利を

事務局長　北原　鉱治氏

八五年一月から、代替地への表土移送に対する闘争が組まれた。石橋への代替地に運ぶために、トラックのナンバーをガムテープで隠したりしながら、やっとのことで終了宣言を行い、遠々の体で退散した。この表土移送阻止闘争にひき続き用水粉砕闘争が激烈に闘われている。連日連続闘争が組まれ、粘り強い用水絶対反対の闘いが展開されている。権力・公団、用水推進派は十一月二五日から二七日までの三日間、全国から九千五百名という機動隊をかき集め、菱田を蟻のはい出るすき間のないような過剰警備体制を敷き、用水工事作業員の杭打ちまでも機動隊員が手伝うという事態が生じている。

我々反対同盟は、この九千五百を相手に断乎屈することなく闘っている。流血を辞さず逮捕を恐れず闘い抜いている。用水工事二期そのものである。菱田反対同盟先頭に断乎勝利する。十・二〇全国総決起集会には、全国から一万四千名にのぼる動員を勝ち取った。権力・機動隊一万名を向うに回し、実力粉砕闘争が闘い抜かれた。権力能神話は粉々に打ち砕かれた。

そして今から十五年前に遡る反対同盟が実力で闘った七一年強制代執行闘争と同時に闘われた東峰十字路戦闘―六年二期決戦の勝利を！

土地を手放さない

敷地内東峰　島村　良助氏

政府・公団は八・二八プラン論んでいる。八五年初頭、二期敷地内の我々の土地のすぐ隣において表土移送を行う菱田地区に、なぜ敢えて公団が補助金を上乗せして用水をもって来たか。これこそ敷地内外の分断、反対同盟の破壊・解体以外の何ものでもない。反対同盟の田が存在している限り、菱田工区の完成はあり得ない。日帝は十一月二五日から九千百名の機動隊を導入し成田用水を強行着工した。四割もの農民が反対している中、完成などあり得ない。

公団は二期工事に向けて用

天皇在位60年式典を爆砕せよ

山谷

天皇主義ファシストとの実力持久戦に勝利し寄せ場を階級的労働運動の出撃拠点へ！

四年目に突入した天皇主義右翼との実力戦を闘い抜く山谷、流動的下層労働者は、十月十九日西戸組幹部・軍司興力斜弾の闘いの直後より、権力の弾圧策動の中で三誠興業争議を準備してきた。

十一月十四日―十五日の両日に亘り、日雇全協・山谷争議団と寿日雇労働者組合の仲間は共同闘争として三誠争議を闘い抜いた。三誠興業争議は、寄せ場に天皇主義右翼が武装登場し、更に佐藤さんをテロ虐殺するという寄せ場支配の決定的煮つまり状況の中で、ファシストの攻撃から出撃拠点としての寄せ場を防衛し抜き、一歩撃って出る闘いとして現在もなお継続して闘い締られている。

三誠興業とは、右翼暴力団―住吉連合傾家一家・愛国維新会が経営する暴力飯場だ。旧来は寿で暴力団山田組を通して、現在は新宿を中心に駅手配によって常時七〇名―一〇〇名の労働者を使い、そのことをとくが条件違反・賃金不払い、更に暴力行為常習という文字通り現代のタコ部屋飯場ともいうべき業者だ。

闘いは山谷争議団の呼びかけの下、まず十一月十四日早朝より被害労働者を先頭に決起した五〇名を越える仲間が、三誠が明城建設（大林組の第二次下請）を通して労働者を送り込んでいる地獄の大林組ビル建設現場での争議から開始された。一時間に亘って現場のミキサー車―コンクリート打ち作業をストップさせ、大林組に対し元請責任を追求し、大林―明城―三誠の三者がそろった衆団交を三誠興業飯場でもつことを確認させ、所沢にある三誠飯場へと向った。待ち受ける私服・移動交番車、更にはバリケードをはって妨害する三誠職員（暴力団）に対し、権力の介入を阻止し、実力でバリケードを撤去して三誠興業飯場内での団交を貫徹した。数人の暴力団員を奥に秘まさせ、労資関係よりは暴力団の看板を威圧材料にして対応する三誠興業に対し、一つ一つの事実を突きつけ、その悪業を追及し、三誠社長を寿の寄せ場に出て来ることを確認させた。十五日、山谷・寿の同時倒産の中で新たに名乗り出た二名の被害労働者を加え、一〇〇名を越す仲間の怒りの渦の中で三誠社長に土下座させ、更に明城、大林、とりわけ大林組の元請責任を徹底して追求した三者に、（1）悪業とその元請責任について謝罪、（2）現在明らかとなっている被害労働者への補償と賃金精算、（3）いまだ埋れている全ての被害労働者を発掘する作業とそれへの補償と精算を確認させた。

しかし、以降三誠は社長と事務員をトンコ（逃亡）させ被害労働者について分らないと居直り、更に大林組も確認書は、「異常な状況下のものであり反古にする」と居直って来た。山谷争議団は、これらの居直りを糾弾しつつ、寿日労と共に更に被害労働者を発掘しつつ闘いを継続している。

労働者階級の本来的革命性と国際性を復権せよ！

三誠興業争議は、従来の半タコケタオチ戦の積み重ねを継承しつつ、その地平を一歩踏み越えるものとして闘い抜かれている。悪質な業者・飯場に対して、その悪業への怒りを闘いの拠点である寄せ場にいる労働者に訴えかけ組織し、その力で飯場に押しかけて争議に勝利（解決）してゆくという従来の形態を踏みつつ、そこから一歩踏み出して、積極的に被害労働者の闘いに対する危機意識に身構えた対応の一証左だ。

日雇全協の創建と三年目を迎えた西戸戦実力闘争は、闘いの主体として一層の飛躍を名指しにしての総会議題にも明らかな様に、建設独占資本公園などでの街頭手配が従来とときにくい分だけ悪質業者がはびこっている。それらの業者―暴力団が右翼暴力団として労働者への天皇イデオロギー攻撃を強めるとともに、右翼活動の拠点となっているのだ。

このことは状況の煮つまりと運動の到達段階の主客に亘る現状から必然的に問われている課題である。

現在、駅ターミナルや周辺公園などでの街頭手配が従来にも増して多くなり、連動がとどこおっている。

日雇全協の創建と三年目を迎えた西戸戦実力闘争は、闘いの主体として一層の飛躍を要請する段階へと到達した。流動的下層労働者の寄せ場を出撃拠点とした闘いは、日々雇用され、その都度解雇されるという雇用の不安定性、更に、それ故に就労が死活の問題となり、その多くが暴力団―手配師に握られており、その形態も職安、直行、路上求人と多岐に亘り、そして労働者自身が仕事を求めて寄せ場を中継点として全国の下層から下層へと流動するという姿態のその存在―多くは強いられた状況―を武器に転嫁して支配を撃つ闘いである。

常に生産点には一方的に動員され、更に個々別々であり一過性である存在故に生産点での闘い―ストライキをうつ―が非常に困難であるが故に、何としても労働者の発現を求める闘いが、居住区―ドヤ街での共同性の中で暴動として爆発し、その暴動を労働者権力にまで高め上げる釜共・現闘の地平を継承して日雇全協を創造し、その存在の多様性・流動性故に支配者が暴力団に担わせてきた労務支配―労働者支配を打ち破るまでに前進してきた。

生産点にいる多くの労働者が労務管理に屈服しストライキも満足にうてなくなるまでにあって、流動的下層労働者は〝奪われている〟が故に熱烈に労働者としての闘い―生産点での闘いを求めて起ちあがる。しかも、戦前全協土建の在日朝鮮人との共同闘争を何としても復権しようとする国際主義をその内実として。

戦後労働運動の歴史の中で流動的下層労働者は常に既成の労働運動からは正当に評価されることはなかった。

今、流動的下層労働者は自らを認めよ、と云うかわりに戦後労働運動そのものを疑えと云う。

一九四五年八月十五日、敗戦の時から―当然戦時下に於ても唯一闘い抜いて来たが―、闘いに決起したのは強制連行されて来た朝鮮人・中国人の炭鉱・鉱山等での闘いであった。そして、この闘いの多くは警察・米占領軍によって鎮圧された。この鎮圧の後に、確実にこの闘いに鼓舞されながら、しかし一切その事に自覚する事なく戦後日本の労働運動は開始された。

この事態の切開なしに日本の階級的労働運動の本格的創建は不可能ではないか。

いま、狭山―部落解放闘争は、天皇主義ファシズムによる、差別糾弾闘争を徹底しおし潰し融和主義を醸成しようとする攻撃が激化する中で、かつてない重大な岐路を迎えている。

我々は、今こそ「全人民的怒りを権力に突きつけていかれるよう一層の努力・奮闘を」訴え「私は常に生命が尽きる迄は闘い抜く」という獄中の石川氏の不退転の決意に応え、吹き荒ぶる暴虐の嵐＝天皇主義ファシズムと、一切の逆流＝融和主義に敢然とたちむかってゆかねばならない。

狭山闘争の解体＝差別糾弾闘争の圧殺を許して部落解放闘争に未来はないのだ。

階級的部落解放闘争を創出すべき我々に課せられた任務は重大である。

すなわち、第一に部落差別と徹底して闘ううえで、差別糾弾闘争はその生命であり核心である。階級深部の怒りを真に組織し解き放つこの差別糾弾闘争を革命的に復権する闘いを狭山闘争を基軸に断乎として推進することである。

そのために、第二に融和主義との対決を一段と鮮明にし、その元凶である「同対審答申」「特措法」―行政依存路線を粉砕しなければならない。今日、融和主義勢力は、「狭山」「終結」「特措法」―路線を強める一方、「特措法」路線から再び戦前の「国策樹立―報国会」運動への道を歩もうとしている。それ故、社共の「沖縄国体の民主化」運動も排外主義の「日の丸」にのみこまれる事は必然だ。

今こそ、「日琉同祖論」批判を鮮明にして「日の丸」攻撃と日帝の国内植民地支配を粉砕しなければならない。

第二の課題は、天皇沖縄上陸粉砕闘争を頂点とする沖縄闘争の戦列に、沖縄解放・社会主義革命の真紅の赤旗を打ちたてることである。

我々は天皇沖縄上陸の飛躍台ともなるべき天皇在位六〇年式典を全力で粉砕し、沖縄解放・社会主義革命の旗を掲げて闘う沖縄人民との団結を戦取して闘う。

第三の課題は、階級深部の怒りと国際主義で、沖縄人民と「本土」階級深部の団結を戦取し、沖縄闘争勝利の礎を構築することである。

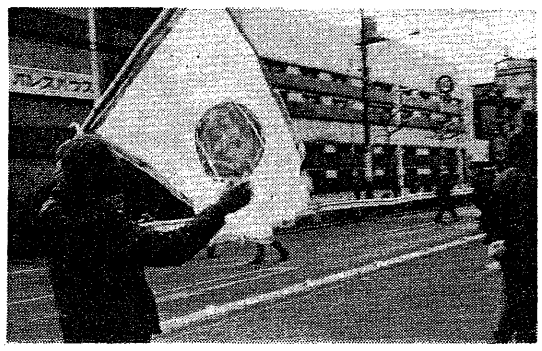
日帝は、差別支配を根本的動機として沖縄人民に、「国益のためにはやむを得ない」と沖縄経済の破壊を含めあらゆる犠牲を押しつけている。

まさに、沖縄は、日帝の侵略反革命の犠牲の集約点であると同時に階級矛盾の集中点ともなっている。

資労働と資本の矛盾が集中し、ファシズム攻撃が鬱いかかる「本土」の階級深部が自国帝国主義打倒闘争をもって沖縄解放を闘う沖縄人民との階級的団結をかくとするならば日本列島と琉球弧の全土を革命的内戦の炎で燃やしつくすことができるであろう。

八六年を階級深部の国際主義で、日帝と天皇を打倒する階級的労働運動の一大飛躍の年として戦取しよう！

佐藤さん虐殺の怒りを燃えたたせ、実力持久戦へ！
（写真は、85年12月22日、山谷玉姫公園における虐殺一ヶ年糾弾・追悼集会）



「紀元節・粉砕闘争で黒枠の「日の丸」に火を放つ日雇全協・山谷争議団

沖縄

八七年天皇沖縄上陸「日の丸国体」を粉砕せよ

「資本主義の最後的死滅」という歴史的な背景の中で噴出する国際的な階級闘争の新たなうねりは、帝国主義者に死の恐怖を与えている。侵略と排外主義をむきだしにした帝国主義者は、八六年も、プロレタリアート人民に新たな重圧と犠牲を課すべく鬱いかかってきている。沖縄人民を襲っている核安保―基地の飛躍的強化と八七年天皇の沖縄上陸攻撃を頂点とする皇国・皇民化攻撃を沖縄人民に「第二の沖縄戦」を強制する以外の何物でもない。かかる攻撃が日帝の死活をかけたものである以上、我々は、沖縄人民と「本土」階級深部の団結、国際主義の砦を構築し、八七年天皇の沖縄上陸を断乎として粉砕する決意である。

「日の丸」掲揚・「君が代」斉唱の強制と八七年「海邦国体」を名目とした天皇ヒロヒトの沖縄上陸が、それである。

日帝・文部省は沖縄が「日の丸」掲揚の低率県（八四年度における掲揚率・全国平均九二・〇％、沖縄六・九％）であること、「学校の行う儀式や行事等において積極的に国旗を掲揚し、国歌を斉唱するよう強力な指導」の通知を行ってきた。そして県市町村議会がこれに迎合し、矢継早に「掲揚・斉唱励行」決議をあげた。

日帝が、沖縄においてかくも、「日の丸」「君が代」に固執する理由は何か。それは、沖縄人を異族として差別支配してきた日帝にとって、「日の丸」「君が代」は島の姿が変わるほど激しかった沖縄戦で、二〇万人におよぶ沖縄人が、米軍・日本軍によって虐殺・自決を強制された事実、この地域の戦場に沖縄人が狩りだされたのも「日の丸」のためであった事実、そして、天皇の命乞いのために日帝の敗戦処理過程で沖縄が米帝に売り渡された事実。また、日本への「復帰」が、日帝の国内植民地差別支配の再開であった事を物語っている。

「日の丸」「君が代」に反天皇・反「日の丸」の闘いは、歴史的な必然性をもった民族的階級的決起として日帝の恥部をえぐえぐり出す闘いになるが故に、日帝は、八七年九月（夏季大会）と十月（秋季大会）に画策している沖縄「日の丸国体」・天皇上陸までの二年間に、反「日の丸」勢力の一掃を何としてもやりきらなければならないのだ。侵略戦争を激化し、「日本軍による住民殺害」の記述削除等、沖縄戦の事実を隠蔽し、「ひめゆり」を殉国美談として、くりかえされる「教科書の毒書換え」攻撃を、この攻撃と機を一にするものだ。

「ヤマトンチュ」になりたい」と日帝の走狗と化した西銘は「天皇陛下のご臨席の栄を鵬わり沖縄の戦後を終らせていただきたい」と天皇上陛下の下地づくりに躍起となり、西銘の招請に対して天皇は、沖縄人虐殺の張本人であることを棚上げして「沖縄とは縁が深い。ぜひ出席したい。」などとぬかしている。西銘を頭目とする「日の丸」勢力を打破し、沖縄解放勢力の飛躍的な強化がかちとろう！

新たな琉球処分＝特措法二〇年強制使用を許すな！

昨年の八月、那覇防衛施設局から出された末契約軍用地特措法に二〇年間にわたって強制使用できる裁決申請が、県収用委員会によって受理された。これによって嘉手納基地をはじめとした十二施設六五万四千平方㍍の広大な土地が強奪され、再び、米軍によって占拠されようとしている。

日帝は「米軍の駐留は今後相当長期にわたると考えられ施設・区域の安定的使用を図る必要がある。」と言っている。二〇年の裁決申請は米奴隷と矛盾しないので裁申請は適法であると土地強奪を居直っている。土地強奪の戦後の歴史だけを見ても、米軍政の下で二七年、日帝支配下で一五年、さらに二〇〇七年までの二〇年間の強制使用を沖縄人民に強要するものであり、六二年間におよぶ土地の強奪こそ、「新たな琉球処分」以外の何物でもない。

「国の安全を図るために」は沖縄人は犠牲になれ、というように等しいこの攻撃こそ、天皇の延命と「国体護持」のため沖縄決戦を沖縄人に強制し、集団自決の強要と虐殺を図った、あの沖縄差別支配そのものではないか！

八七年五月に土地を強奪しておいて、秋の「日の丸国体」には「日の丸」の旗をふって心よく天皇を迎えろ、というのは日帝の国内植民地＝沖縄差別支配のみがなせる業である。皇国皇民化の同化攻撃を許さず、米軍用地特措法発動による二〇年強制使用の暴挙を粉砕せよ！

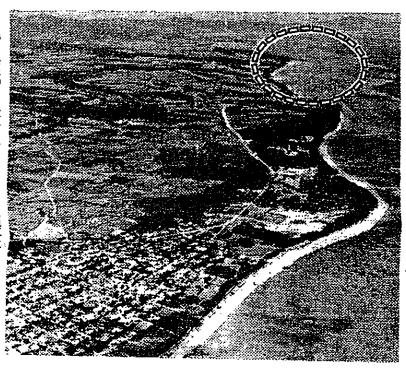
東南アジア侵略反革命の前線基地＝白保軍事空港着工阻止

日帝は、「新石垣空港」の八六年予算の概算要求として三億八千七百万円を計上（総額は三百億円）し、すでに、昨年の十月には、抜き打ち的に、白保の海域に標柱をたてるという暴挙を行っている。東南アジア諸国を新植民地経済の支配下においた日帝は、これら独自の国有市場の安定＝「シーレーン防衛」をはかる上で、白保軍事空港の建設が絶対的に必要となり、だから、第三種空港として現在、日帝の天皇主義ファシズム攻撃の激化の中で、日帝の侵略反革命の矛盾が沖縄差別を基底に沖縄に集中的に押しつけられている。

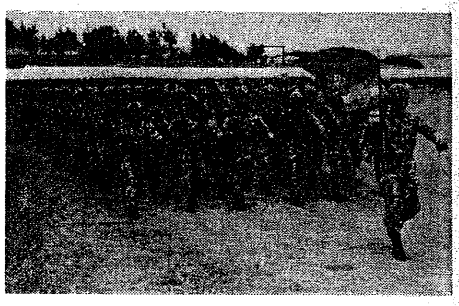
それ故、基地沖縄で顕在化している南西拠点飛躍的強化と「日の丸」「君が代」を強制する皇国皇民化の攻撃は、八〇年代後半の日帝の基本路線を、全面的に先取りしているといっても決して過言でない。

「第二の沖縄戦」を強要する87年天皇沖縄上陸を粉砕せよ！

日帝の国内植民地支配という奇怪な現実の上に、また新たな歴史的な選択を一挙に強制する重圧が沖縄人民を覆っている。



日帝と西銘は八重山諸島の産業振興を計るという建前で白保軍事空港の着手を狙っている。（点線内が白保海岸の予定地



87年沖縄「日の丸国体」には沖縄に進駐した自衛隊の大部隊が「大会運営の万全を期す」を名目として、天皇と「日の丸」防衛のための配備を計画している（写真は陸上自衛隊第一混成団）

われている今日的な課題

天皇上陸攻撃を八七年に仕かえ、沖縄人民は、今、歴史的な岐路にたっている。

沖縄人に大和への同化を強制する「日の丸・「君が代」」は、日帝の国内植民地支配と沖縄人民を再び侵略反革命戦争へかりたてるものである。

第一の課題は、この皇国皇民化の同化攻撃に如何に反撃していくのかという問題である。この攻撃に対決するためには「日琉同祖論」との思想的対決が不可避である。大和民族主義の立場を掲げて、沖縄における同化攻撃を打破することができないことは自明なのである。

それ故、社共の「沖縄国体の民主化」運動も排外主義の「日の丸」にのみこまれる事は必然だ。

今こそ、「日琉同祖論」批判を鮮明にして「日の丸」攻撃と日帝の国内植民地支配を粉砕しなければならない。

第二の課題は、天皇沖縄上陸粉砕闘争を頂点とする沖縄闘争の戦列に、沖縄解放・社会主義革命の真紅の赤旗を打ちたてることである。

我々は天皇沖縄上陸の飛躍台ともなるべき天皇在位六〇年式典を全力で粉砕し、沖縄解放・社会主義革命の旗を掲げて闘う沖縄人民との団結を戦取して闘う。

第三の課題は、階級深部の怒りと国際主義で、沖縄人民と「本土」階級深部の団結を戦取し、沖縄闘争勝利の礎を構築することである。

日帝は、差別支配を根本的動機として沖縄人民に、「国益のためにはやむを得ない」と沖縄経済の破壊を含めあらゆる犠牲を押しつけている。

まさに、沖縄は、日帝の侵略反革命の犠牲の集約点であると同時に階級矛盾の集中点ともなっている。

資労働と資本の矛盾が集中し、ファシズム攻撃が鬱いかかる「本土」の階級深部が自国帝国主義打倒闘争をもって沖縄解放を闘う沖縄人民との階級的団結をかくとするならば日本列島と琉球弧の全土を革命的内戦の炎で燃やしつくすことができるであろう。

狭山闘争の革命的意義を復権せよ！

我々は、今こそ狭山闘争の部落解放闘争―日本階級闘争にしぼる革命的意義を全人民にはっきりとさし示してゆかねばならない。

狭山差別裁判は、差別に呻吟する部落大衆に対して国家権力が新たに打ちこんできた差別のくさびであった。

だが獄にとらわれ、自らの青春を国家権力によってふみにじられた石川氏は、獄壁を突き崩す無実の叫びをあげ、不退転の闘いに起ちあがったのである。

この石川氏の無実の叫びに、全国の部落大衆は、差別され虐げられてきた自らの現実をみ、階級深部の怒りを燃えあがらせ、部落解放運動の命運をかけて狭山差別裁判糾弾・石川氏奪還の実力闘争に起ちあがり、狭山闘争を一大政治闘争へとおしとげていった。

そして、この狭山闘争を通して、部落大衆は、日帝国家権力への怒りを研ぎ澄まし、差別糾弾闘争こそ権力との非和解性を顕在化し階級支配の根幹を揺るがす闘いの途であり、部落解放運動の生命であることを確信してきた。つまり、差別・抑圧・分断支配の鎖を断ち切り、部落の解放―全人類の解放を切り拓くには、日帝国家権力の打倒へ起ちあがらねばならないことをつかみとってきたのである。

また、全国の労働者人民も獄中にとらわれた石川氏と部落大衆の国家権力に対する怒りの深さに、魂を揺さぶられ狭山闘争に共に起ちあがってきた。

まさに、階級支配の最底辺に差別され虐げられてきた者のみがもつ怒りの深さが、そして日帝の階級支配の根幹をその底辺から揺るがすことができる階級深部の怒りの広さが、プロレタリアート人民の階級的魂をよびさましひきつけてきたのである。

こうして狭山闘争は、国家権力が階級支配の死活をかけて三百万部落大衆と全人民に対して打ち込んできたこの差別・分断のくさびを、徹底して糾弾することを通して、逆にこれを労働者人民の側の革命的転回点として、つまり日本階級闘争の構造そのものを革命的に転換してゆく闘い、部落大衆と労働者人民との一大階級的共同闘争へとおしあげてきたのである。

獄中三年目を迎えた石川氏は、今もなお「仮釈放」は「改悛」を条件とした屈服・転向路線であるとしてこれを拒否し、「狭山闘争が真の戦闘的階級的共同闘争の実践に向けて」力を発揮していくことを訴えている。この石川氏の苦闘に応え、狭山を基軸的推進軸に階級的部落解放闘争を創出せよ！

部落

融和主義勢力を踏みしだき階級的部落解放闘争の創出を！

階級深部の国際主義で流動的下層労働者と共に86年を階級的労働運動の飛躍の年とせよ！

日帝・中曽根は八五年、「靖国神社」公式参拝をテコとした天皇イデオロギー攻撃を頂点に、軍事費のGNP一％枠突破、三里塚―成田用水・辺田・中郷強行着工、国鉄「分割・民営化」攻撃等と、「戦後政治の総決算」攻撃を一層推進し、ファッシズム突撃内閣としての本質を前面化させて来た。そして、八六年東京サミット、天皇在位六〇年式典と反撃早の闘いを、飛躍の八六年を競塞期の越年・越冬闘争として、文字通り闘い取ってきている。

山谷争議団は、一二・二三の闘いにおいて、佐藤さんの無念をはらし、ファシストを完全解体する実力戦の一層の強化と、八六年天皇在位六〇年式典粉砕―八七年天皇沖縄上陸攻撃として煮つまる天皇主義ファシズム攻撃粉砕の闘いを最先頭にたって闘い抜く決意を明らかにすると共に、闘争の天皇主義ファシズム攻撃と真正面から対決し、一二・二三佐藤さん虐殺一ヶ年糾弾・追悼山谷集会を闘い取り、飛躍の八六年を競塞期の越年・越冬闘争として、文字通り闘い取ってきている。

山谷争議団は、一二・二三の闘いにおいて、佐藤さんの無念をはらし、ファシストを完全解体する実力戦の一層の強化と、八六年天皇在位六〇年式典粉砕―八七年天皇沖縄上陸攻撃と

階級深部の怒りと国際主義で武装し

Xデー攻撃計画を全面暴露し天皇闘争の最前線に蜂起派の旗を

戦後政治の総決算＝Xデー攻撃を許すな！

天皇主義ファシズム攻撃の基軸をなす天皇イデオロギー攻勢が、八六年裕仁在位六〇年式典から八七年沖縄「日の丸国体」―天皇沖縄上陸へと計画的に準備されている。

この二つの大攻勢の狙いは敗戦によって守勢に立たされて来た天皇主義者が一挙的に攻勢に転じて時流を逆転させんとするものである。

換言すれば、敗戦の占領下で発足した新憲法によって消失させられた「国体の本義」を復活させ、文字どうり戦後政治の総決算を果たさんとするものであり、天皇入格を民族宗教の象徴として神格化せんとするものであった。

即ち、閣僚の「靖国」公式参拝から地方議会と行政による「日の丸」「君が代」攻撃へと一連の天皇イデオロギー攻勢を展開してきた天皇主義ファシスト達は、遂に敗後の劣勢から優勢に転ずべく一大攻撃を計画したのである。

そして、このファシズム大攻勢の計画こそが、八六年天皇在位六〇年式典攻撃と八七年沖縄「日の丸国体」―天皇沖縄上陸攻撃なのである。

天皇主義ファシスト達は、裕仁の在位六〇年式典を大規模に開催し、マスコミを動員して戦後政治の転換と時流の一変を印象づけようとするだけではなく、行政・学校・労働組合を通じて式典への屈服を強制するのである。

天皇主義ファシスト達は、「本土」において、まず、天皇を賛美し、「日の丸」を掲げ、「君が代」を唱うことに抵抗できない時代思潮をつくり上げ、その勢いに乗って沖縄へ天皇を上陸させ、沖縄人民を「日の丸」と「君が代」の下に屈服させ、天皇への忠誠を誓わせようと計画しているのである。

天皇のイデオロギーによる「本土」支配を踏襲として沖縄人民の蹂躙をも果たさんとしているのである。

これが、日帝の天皇主義ファシズム攻撃における八六年天皇在位六〇年式典ならびに八七年沖縄「日の丸国体」―天皇沖縄上陸の位置づけである。

だが、しかし、我々は、この二つの天皇イデオロギー攻撃が、そこで終るのではなくXデーに連続して計画されていることを暴破し、闘いの戦列を組まねばならない。

つまり、Xデーを予測された攻撃の頂点として設定し、そこから逆に天皇イデオロギー攻撃が計画されているということである。

裕仁が没して「昭和」が終る日をXデーとして設定し、裕仁の崩御・大葬から始まり新帝の即位礼・大嘗祭に至る皇室祭祀を行い、諸階級諸階層に皇族への「尊敬」の態度を強要しつつ同時に天皇制への集団的帰属意識を植え付けようとしているのである。

要するに、Xデーに始まる最大の皇室儀礼の強行をもって、天皇イデオロギー攻撃の総仕上げとし、諸階級諸階層を天皇イデオロギーの下に屈服させ、天皇と皇族への「忠誠」と「尊敬」を詔勅抜きに前提とする風潮を完成しようとしているのである。

それでは、天皇主義ファシストが戦後政治の総決算として奪還せんとする「国体の本義」とは何であろうか。その本質は、一九三二年七月、同第一冊事部も、「万世一系ノ天皇ヲ君主トシテ奉戴スルコトカ我国ノ国体ナリ、換言スレハ万世一系ノ天皇ヲ戴ク君主制カ我国ノ国体ナリ」とした。

「時を同じくして、天皇主義右翼ファシスト大川周明は、「総ての日本国民は天皇によって統一せられる国家の中に於いてのみ存在の価値を得来るのである。日本の皇室をして世界の不思議たらしめたのは実に信仰である」という立場から、「国体」イデオロギーを展開した。

『日本及日本人の道』（一九六年刊）は、「日本の天皇は、家族の父、部族の族長が共存体の自然の発達に伴ひて国家の君主となられたものであります。而して国初以来、国祖の御子孫が連綿として今日まで国家に君臨されて居る」と述べている。

即ち、一家の父＝部族の族長＝族長の族長＝君主という「家族国家観」が血縁関係を根拠として「君臣一家論」に高められているのである。

そこから「日本国」に於て、国民は天皇を通じて自己の生命の本原に連って居ります。総ての生命を統一する最高の生命が、日本の国家に於いては天皇によって我々に対して居るのであります。」と述べ、天皇を総ての国民の宗教的対象に高めているのである。

大川周明の「国体」イデオロギーは、万世一系論を基軸として家族国家論を説き、血族共同体の族長＝部族の族長としての天皇＝国祖の現身への忠誠を強要しつつ同時に天皇闘争の最前線に立つことである。

「国体」イデオロギーの復活狙うXデー

ロシア革命の勝利と過渡期世界の開幕を機に、「国体」問題が政治の焦点となった。

一九二五年の治安維持法も「私有財産の廃止」国体を変革することを目的として」結社を組織する者たちを死刑や長期懲役刑に処すとした。

一九二九年五月、大審院は「国体」について、「我帝国ハ万世一系ノ天皇君臨シ統治権ヲ総攬シ給フコトヲ其テ其ノ国体ト為シ、治安維持法第一条ニ所謂国体ノ意義亦之ニ外ナラズ」と断定した。

一九三二年七月、同第一冊事部も、「万世一系ノ天皇ヲ君主トシテ奉戴スルコトカ我国ノ国体ナリ、換言スレハ万世一系ノ天皇ヲ戴ク君主制カ我国ノ国体ナリ」とした。

「時を同じくして、天皇主義右翼ファシスト大川周明は、「総ての日本国民は天皇によって統一せられる国家の中に於いてのみ存在の価値を得来るのである。日本の皇室をして世界の不思議たらしめたのは実に信仰である」という立場から、「国体」イデオロギーを展開した。

『日本及日本人の道』（一九六年刊）は、「日本の天皇は、家族の父、部族の族長が共存体の自然の発達に伴ひて国家の君主となられたものであります。而して国初以来、国祖の御子孫が連綿として今日まで国家に君臨されて居る」と述べている。

即ち、一家の父＝部族の族長＝族長の族長＝君主という「家族国家観」が血縁関係を根拠として「君臣一家論」に高められているのである。

そこから「日本国」に於て、国民は天皇を通じて自己の生命の本原に連って居ります。総ての生命を統一する最高の生命が、日本の国家に於いては天皇によって我々に対して居るのであります。」と述べ、天皇を総ての国民の宗教的対象に高めているのである。

大川周明の「国体」イデオロギーは、万世一系論を基軸として家族国家論を説き、血族共同体の族長＝部族の族長としての天皇＝国祖の現身への忠誠と「尊敬」を詔勅抜きに前提とする風潮を完成しようとしているのである。

それでは、天皇主義ファシストが戦後政治の総決算として奪還せんとする「国体の本義」とは何であろうか。その本質は、

12・22佐藤さん虐殺一ヶ年糾弾・追悼集会が大成功！

権力・ファシスト打ち倒す実力持久戦で85―86山谷越年越冬闘争の勝利を！

十二月三百、山谷の街は佐藤さん虐殺一ヶ年の怒りの炎が燃えたぎった。

「虐殺一ヶ年糾弾・追悼集会」が、小雨が降る中、玉姫公園において闘いとられた。午後二時半、集会は開始され冒頭、主催団体の全国日雇労働組合協議会の決意表明、そして佐藤さんに黙とうがささげられた。続いて、友人代表として有志の会からの決意を受け、基調提起に移っていった。基調は、まず「今、私達は、一層深まる悲しみを抱いて、そして、ファシスト＝虐殺者への押え切れぬ怒りをもって結集している」ことを明らかにし、「佐藤さんと共に生きること」とは、「虐殺者＝金町一西戸組に報復―解体の鉄槌を打ちおろしていく」ことだと鮮明に提起された。

次に、映画製作資金のカンパアピール、日雇全協各支部からの発言と続いた。笹目労働者は、「広範な陣形と断乎とした実力闘争で虐殺糾弾の闘いを」、釜日労・争議団は「狩り込みとファシストによるテロは日帝の侵略戦争へ向けた攻撃であり粉砕していこう」、寿日労は「やられたらやり返せ、の闘いをやっていこう」と決意を明らかにした。

連帯アピールとして、部落解放同盟足立支部、福岡日雇労働組合（準）、赤堀闘争闘委、反天皇戦線そして三里塚反対同盟、沖縄から天城島天民の反対同盟は清宮芳幸氏が発言に立ち、「私たちは、山谷の皆さんと共に、やられたらやり返せ、という闘いをやっていきたい。」と熱い連帯の思いを明らかにし、三里塚では「用水闘争が軍日闘い抜かれている。」「実力で用水を粉砕する。」と力強く発言した。

最後に、上映実行委の決意表明、各山谷争議団員の決意表明を受けていった。

集会を圧倒的に勝ちとった日雇全協と山谷争議団を先頭とする五百名を越える部隊は玉姫公園から出撃し、果敢なデモを断乎として闘い抜いたのである。雨中をつき、怒りで武装したデモ隊の前に、もはや、機動隊の規制はないに等しい。金町一家の事務所と自らの拠点マンモス交番を防衛するのが精一杯。堅いスクラムによるジグザグデモは、文字通り、山谷が労働者の街であり、権力や天皇主義ファシストの跳梁を許さない街だという事を見せつけたのだ。

映画「山谷―やられたからやり返せ」の初上映は、東京動労福祉、絶に場所を移し、熱気が満ちあふれた。佐藤さんが自らの生命を賭して、山谷労働者の生活と闘いに何を見たのか、我々は、この映画を観て断言できる。下層労働者の闘いの中にこそ、労働者階級の未来があり、日本階級闘争の勝利の展望を切り拓く力があるのだ、という事を。

日帝と天皇を焼きつくす85―86山谷越冬闘争へ！

十二・二三佐藤さん虐殺糾弾の闘いが鮮明に指し示した事は、虐殺という悲しみを、権力とファシストを粉砕する力に変え、階級深部の煮えたぎる怒り―下層労働者の闘いこそ、ファシズムの暗闇を焼きつくし、日帝と天皇を打倒する真紅の炎となってますます燃え上がっている、という事である。三年目を迎えた実力戦闘を山谷労働者が闘い抜き、そうであるからこそ、天皇主義ファシストは恐怖と憎悪し、尖鋭な反革命襲撃をかけてきたのである。まさに山谷における激突は、天皇主義ファシズムとの階級決戦の前哨戦として、日本階級闘争の未来を凝縮した闘いである。かける地平を堅持し、発展させる事こそ八五―八六越冬闘争の第一の任務であり、我々は、山谷労働者と共に、何がなんでも歴史の扉をこじ開けていく決意である。

天皇主義ファシストとの実力戦闘を徹底して闘うという事は、同時に、浅草マンモス機動隊の包囲網＝治安弾圧体制と地域の反動勢力と対決しぬく事である。アメとムチ、差別・分断のアプレ支配と野蛮な攻撃に抗し、「君が代」「日の丸」の一大攻撃に抗し、沖縄解放闘争を掲げ決起する沖縄人との団結を強め、連帯を求めていかなければならない。

第三は、寄せ場の闘いは、反天皇闘争の一大拠点を創出する闘いである、ということ。天皇主義ファシスト供は守勢から攻勢への一大転換をまさに、八六年天皇在位六〇年式典を機に画策している。絶対に許さず、六〇年式典を粉砕する一大突破口として越冬闘争を勝ちとっていかなくてはならない。

第四は、住吉連合・「愛国維新会」の下にあるタコ部屋的暴力飯場＝三誠興業の闘いをはじめとした争議に勝ち抜き、下層労働者の陣殺的団結を打ち固め、寄せ場を階級的労働運動の出撃拠点とせよ。

最後に、「愛国主義」に純化したプロ革―山統労を批判していかなければならない。

八五―八六越冬闘争は、戦後の階級闘係を根幹から揺るがし、革命的転換を迫る闘いとして勝ちとっていこう。

共に、越冬闘争に起こう！

12・10東京

十二月十日、山谷労働者支援東京集会（主催＝山谷共闘委員会）が南部労政会館において圧倒的に勝ちとられた。

集会は冒頭行民の講演で始まった。冒民は、「戦後政治の総決算」の内容を①戦争体制化、②戦争へ向けた国内整備としての行革と臨教審攻撃、③国民統合の歴史的イデオロギー攻撃、として大きく三点の内容をつき出し、階級闘争の最前線としての三里塚と山谷の位置を鮮明にした。

続いて、三里塚反対同盟北原事務局長からのアピール文を反帝戦線三里塚現地駐屯隊の同志が代読し、三里塚における三期決戦として闘い抜いていることを報告した。野戦病院の朝田じげる氏は、権力に対する憎しみと敵愾心を怒りで闘おうと力強く発言した。

次に、笹島と沖縄から連帯アピールが寄せられている事を明らかにし、基調提起、プロモーションフィルムの上映山谷争議団で闘う仲間からの決意表明と続いた。

集会に参加した「精神障害者」O氏からは「精神衛生法」を徹察する軍事力の飛躍的強化、②戦争へ向けた国内整備としての行革と臨教審攻撃、③国民統合の歴史的イデオロギー攻撃、として大きく三点の内容をつき出し、階級闘争の最前線としての三里塚と山谷の位置を鮮明にした。

続いて、三里塚反対同盟北原事務局長からのアピール文を反帝戦線三里塚現地駐屯隊の同志が代読し、三里塚における三期決戦として闘い抜いていることを報告した。野戦病院の朝田じげる氏は、権力に対する憎しみと敵愾心を怒りで闘おうと力強く発言した。

最後に、上映実行委の決意表明、各山谷争議団員の決意表明を受けていった。

集会を圧倒的に勝ちとった日雇全協と山谷争議団を先頭とする五百名を越える部隊は玉姫公園から出撃し、果敢なデモを断乎として闘い抜いたのである。雨中をつき、怒りで武装したデモ隊の前に、もはや、機動隊の規制はないに等しい。金町一家の事務所と自らの拠点マンモス交番を防衛するのが精一杯。堅いスクラムによるジグザグデモは、文字通り、山谷が労働者の街であり、権力や天皇主義ファシストの跳梁を許さない街だという事を見せつけたのだ。

映画「山谷―やられたからやり返せ」の初上映は、東京動労福祉、絶に場所を移し、熱気が満ちあふれた。佐藤さんが自らの生命を賭して、山谷労働者の生活と闘いに何を見たのか、我々は、この映画を観て断言できる。下層労働者の闘いの中にこそ、労働者階級の未来があり、日本階級闘争の勝利の展望を切り拓く力があるのだ、という事を。

日帝と天皇を焼きつくす85―86山谷越冬闘争へ！

十二・二三佐藤さん虐殺糾弾の闘いが鮮明に指し示した事は、虐殺という悲しみを、権力とファシストを粉砕する力に変え、階級深部の煮えたぎる怒り―下層労働者の闘いこそ、ファシズムの暗闇を焼きつくし、日帝と天皇を打倒する真紅の炎となってますます燃え上がっている、という事である。三年目を迎えた実力戦闘を山谷労働者が闘い抜き、そうであるからこそ、天皇主義ファシストは恐怖と憎悪し、尖鋭な反革命襲撃をかけてきたのである。まさに山谷における激突は、天皇主義ファシズムとの階級決戦の前哨戦として、日本階級闘争の未来を凝縮した闘いである。かける地平を堅持し、発展させる事こそ八五―八六越冬闘争の第一の任務であり、我々は、山谷労働者と共に、何がなんでも歴史の扉をこじ開けていく決意である。

天皇主義ファシストとの実力戦闘を徹底して闘うという事は、同時に、浅警マンモス機動隊の包囲網＝治安弾圧体制と地域の反動勢力と対決しぬく事である。アメとムチ、差別・分断のアプレ支配と野蛮な攻撃に抗し、「君が代」「日の丸」の一大攻撃に抗し、沖縄解放闘争を掲げ決起する沖縄人との団結を強め、連帯を求めていかなければならない。

第三は、寄せ場の闘いは、反天皇闘争の一大拠点を創出する闘いである、ということ。天皇主義ファシスト供は守勢から攻勢への一大転換を創り出していくことである。真紅の国際主義の赤旗を鮮明にして闘うことが今ほど求められている時はない。日雇全協―在日朝鮮人の指紋押捺拒否の闘いに断乎として連帯